

平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡

2018年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡

2018年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、道路整備工事に伴う平安京跡・御土居跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成30年3月

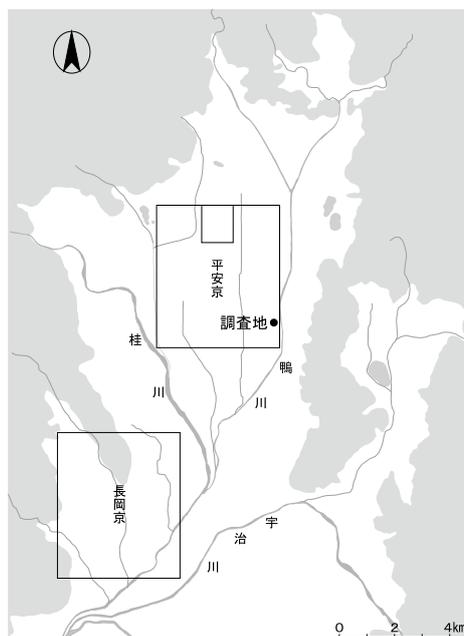
公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 井 上 満 郎

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 平安京跡・御土居跡（京都市番号 16 H 195） |
| 2 調査所在地 | 京都市下京区郷之町他地内 |
| 3 委 託 者 | 京都市 代表者 京都市長 門川大作 |
| 4 調査期間 | 1区：2017年1月23日～2017年2月10日
2区：2017年10月10日～2017年11月13日
3区：2017年12月6日～2017年12月28日 |
| 5 調査面積 | 1区68.1㎡ 2・3区238㎡ |
| 6 調査担当者 | 1区：山下大輝、2・3区：李 銀眞 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「五条大橋」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 遺構番号 | 1区、2・3区ごとに通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 12 遺物番号 | 1区、2・3区ごとに通し番号を付した。 |
| 13 本書作成 | 山下大輝・李 銀眞 |
| 14 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。 |

(調査地点図)



目 次

第1章 調査経過	1
第2章 位置と環境	4
1. 歴史的環境と立地	4
2. 既往の調査	5
第3章 1区の調査	6
1. 遺 構	6
(1) 基本層序	6
(2) 近代の遺構	6
(3) 近世の遺構	7
2. 遺 物	9
(1) 遺物の概要	9
(2) 土器類	9
(3) ガラス製品	9
(4) 瓦類	10
第4章 2・3区の調査	11
1. 遺 構	11
(1) 基本層序	11
(2) 第1面の遺構	11
(3) 第2面の遺構	15
(4) 第3面の遺構	21
2. 遺 物	22
(1) 遺物の概要	22
(2) 土器類	22
(3) 瓦類	24
第5章 ま と め	25

図 版 目 次

図版 1	遺構	1 区第 1 面平面図 (1 : 80)
図版 2	遺構	1 区第 2 面平面図及び石積み 2 立面図 (1 : 80)
図版 3	遺構	2・3 区第 1 面平面図 (1 : 100)
図版 4	遺構	2・3 区第 2 面平面図 (1 : 100)
図版 5	遺構	2・3 区第 3 面平面図 (1 : 100)
図版 6	遺構	2・3 区西壁断面図 (1 : 50)
図版 7	遺構	2・3 区西壁断面図土層名
図版 8	遺構	2 区北壁断面図 (1 : 50)
図版 9	遺構	1 1 区 第 1 面全景 (北から) 2 1 区 第 2 面全景 (北から)
図版 10	遺構	1 1 区 北断割部掘下げ状況 (北東から) 2 1 区 北断割部断面状況 (北から) 3 1 区 北断割部水路 4・杭跡検出状況 (東から)
図版 11	遺構	1 2 区 第 1 面全景 (北東から) 2 3 区 第 1 面全景 (西から)
図版 12	遺構	1 2 区 第 2 面全景 (北東から) 2 3 区 第 2 面全景 (西から)
図版 13	遺構	1 2 区 カマド状遺構 13 (西から) 2 2 区 カマド 10・12 (東から) 3 2 区 収納施設 29 (西から) 4 2 区 収納施設 30 (西から)
図版 14	遺構	1 2 区 第 3 面全景 (北東から) 2 3 区 第 3 面全景 (西から)

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 2,500)	1
図 2	調査区配置図 (1 : 1,000)	2
図 3	1 区調査前全景 (南から)	3
図 4	1 区作業風景 (南から)	3

図5	2・3区調査前全景（北東から）	3
図6	2区重機掘削状況（北から）	3
図7	2区作業風景（北から）	3
図8	コンクリート擁壁の切削解体状況（西から）	3
図9	3区重機掘削状況（南西から）	3
図10	3区作業風景（北東から）	3
図11	1区北断割部実測図（1：40）	7
図12	1区南断割部実測図（1：40）	8
図13	1区出土遺物実測図及び拓影（1：4）	10
図14	建物1実測図（1：80）	12
図15	建物2実測図（1：80）	12
図16	建物3実測図（1：80）	13
図17	建物4実測図（1：80）	13
図18	井戸14・15実測図（1：40）	14
図19	被熱した礎石	15
図20	建物5実測図（1：80）	15
図21	建物7実測図（1：80）	16
図22	井戸27、井戸39・水甕57実測図（1：50）	16
図23	カマド10・12、カマド状遺構13実測図（1：40）	17
図24	排水施設40実測図（1：40）	18
図25	収納施設29・30・43実測図（1：40）	20
図26	土地造成21・46実測図（1：20）	21
図27	2・3区出土土器類実測図（1：4、24のみ1：6）	23
図28	2・3区出土瓦拓影及び実測図（1：6）	24
図29	明治4年の『六条村絵図』と調査地（2・3区）	26

表 目 次

表1	1区遺構概要表	6
表2	1区遺物概要表	9
表3	2・3区遺構概要表	11
表4	2・3区遺物概要表	22

平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡

第1章 調査経過

本調査は、崇仁北部第一地区区画整理事業（崇仁北部第四住宅地区改良事業）道路整備工事に伴う発掘調査である。調査は京都市より委託を受け、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）の指導の下、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。調査地点は、平安京左京八条四坊八町跡及び御土居跡にあたる。

2013年に実施した調査（図1－調査3）では付け替えられた東西方向の御土居の土墨基底部分を検出されており、2015年に実施した調査（図1－調査5）では近世から近代まで存在した七条舟入の水路の護岸と考えられる南北方向の石列を検出した。当地でも同様の成果が想定され、これに関連する遺構の確認及び当地の変遷を明らかにすることを目的として発掘調査を実施した。

調査区は、文化財保護課の指導の下、2箇所に設定した。北西側を1区、南東側を2区としたが、2区は場内での残土処理のため反転調査を行い、北半を2区、南半を3区とした（図1・2）。1区の調査面積は68.1㎡、2・3区の調査面積は計238㎡である。

1区の調査は、2017年1月23日から開始し、2月10日に作業を終了した。調査における掘削深度は、工事との関係から地表面下0.5mまでとして行った。遺構の構造や時期を明確にするため、京

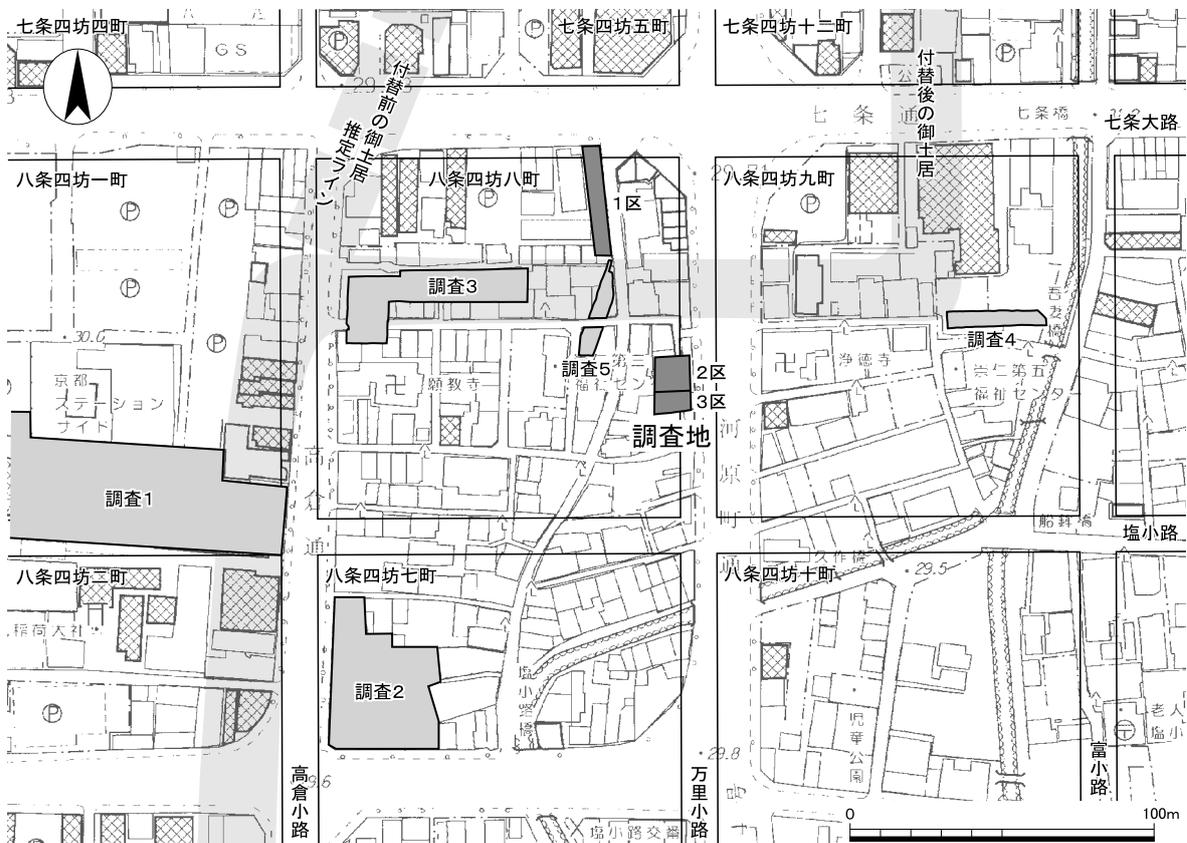


図1 調査位置図（1：2500）

都市の了承を得て、調査区の一部拡張及び断割を行った。

発掘調査は現代盛土を重機掘削で除去した後、人力掘削により遺構の検出を行った。調査は2面の遺構面で行ったが、南北の2箇所断割調査を行い、江戸時代の内浜と高瀬川を繋ぐ水路を確認した。調査では、近代以降の石組溝、近代の石積み、近世の水路などを検出した。

2区の調査は、2017年10月10日から開始し、11月13日に作業を終了した。3区の調査は、2区の南側に面するコンクリート擁壁を解体・撤去した後に開始した。2017年12月6日から開始し、12月28日に作業を終了した。

2・3区ともに現代盛土を重機掘削で除去した後、人力掘削により遺構の検出を行った。第1面（江戸時代末期から明治時代）、第2面（江戸時代後期から末期）、第3面（江戸時代後期の造成土）の計3面に分け調査を行った。調査では江戸時代末期から明治時代初頭までの建物跡、井戸、収納施設、カマド、風呂、排水施設、土坑などを検出した。それぞれの遺構面において図面類の作成、全景・個別遺構の写真撮影などの記録作業を行った

各調査区では調査の進展に伴い、各遺構面の調査終了時には文化財保護課の検査指導を適宜受けた。また、当事業における検証委員である龍谷大学の國下多美樹教授、立命館大学の木立雅朗教授の視察・検証を受けた。なお、調査中には付近住民の方々の見学を随時受け入れた。

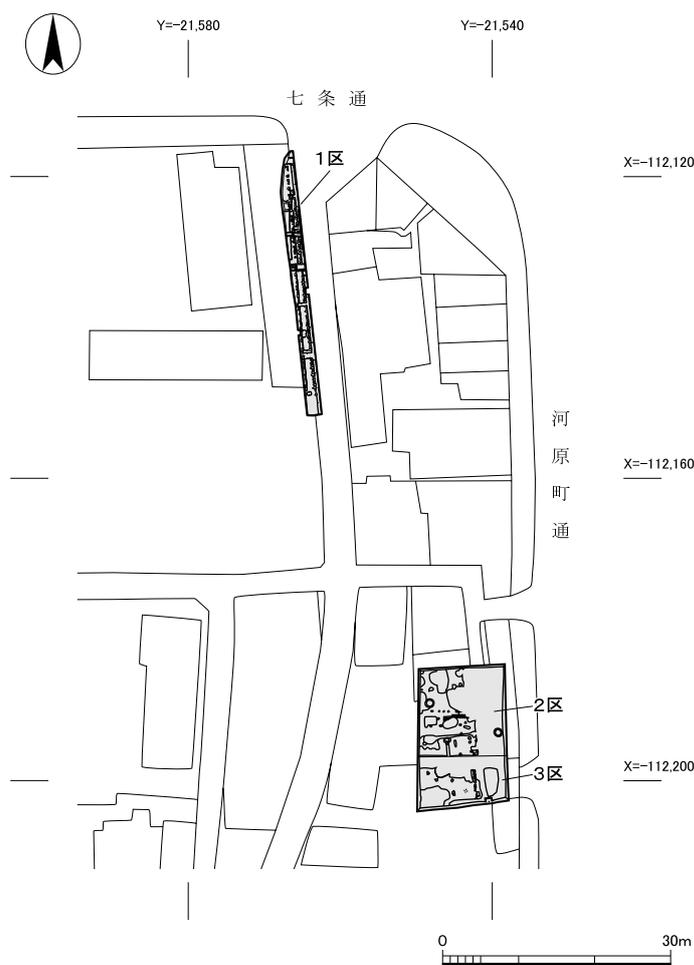


図2 調査区配置図 (1 : 1,000)



図3 1区調査前全景（南から）



図4 1区作業風景（南から）



図5 2・3区調査前全景（北東から）



図6 2区重機掘削状況（北から）



図7 2区作業風景（北から）



図8 コンクリート擁壁の切削解体状況（西から）



図9 3区重機掘削状況（南西から）



図10 3区作業風景（北東から）

第2章 位置と環境

1. 歴史的環境と立地

調査地点は、JR京都駅から北東へ約500m、七条通の南、高倉通の東に位置する。平安京内では南東部に位置し、左京八条四坊八町にあたり、八町内の北寄り（1区）と南東側（2・3区）にあたる。東側600mの地点には鴨川が流れ、鴨川の西岸域である当地は、氾濫原で砂礫層が厚く堆積する。調査地周辺では奈良時代以前の遺跡は知られていない。また平安時代の居住者などを記述した史料はない¹⁾。

安土桃山時代には、豊臣秀吉が京都の都市改造の一環として、天正19年（1591）に洛中を土塁と堀で囲む御土居を築造する。この御土居は、寛永18年（1641）の東本願寺別邸である涉成園造営を契機に、その南東部の一部で付け替えが行われる。これにより現在の六条あたりで北東から南西方向に斜行し、七条通と高倉通の交差点に向かい、高倉通で南北方向に延びていたとされる²⁾。築造当初の御土居は、涉成園東側で南北方向に付け替えられ、七条通南側で西折し、高倉通付近で当初の御土居に接続した。これに関連して、平成25年度の発掘調査では、江戸時代前期に東西方向に付け替えられた御土居の南裾部を検出している³⁾。その位置が今回の調査地の間にあたる。

御土居の付け替えに伴って、慶長19年（1614）に角倉了以によって御土居沿いに開削された高瀬川も流路が変更され、付け替え後の御土居東縁に沿って南流するようになる。これにより、現在の河原町通西、七条通にあった船溜まりは、御土居の内側に取り込まれ、「内浜」の呼称の由来となる。内浜の周辺には材木問屋や倉庫が建ち並び、今回の調査地の地名の由来となっている⁴⁾。この内浜と高瀬川を繋いだ水路が現在、調査地点の間に通る南北道にあたる。

調査地付近は正徳3年（1713）には天部村領の耕作地であったが、文化12年（1815）に六条村が天部村より皮張り場として一部を借り受けている。その後、天保14年（1843）には六条村大西組が立村され、御土居の土塁南側は宅地化される⁵⁾。

明治10年（1844）に神戸－京都間の鉄道が開通したことを契機に、路面電車や京阪電気鉄道なども開通する。これらが要因となり大阪－京都の物資輸送手段は、鉄道志向へと傾き、内浜は大正元年（1921）頃には埋め立てられる。また高瀬川の水運機能も大正9年（1920）に廃止され、内浜と高瀬川を繋いだ水路も埋め立てられる。その後、近代化への流れの中で調査地付近は宅地化が加速されていった⁶⁾。

2. 既往の調査（図1）

平安京左京八条四坊八町内やその周辺では、過去の試掘・立会調査が数件実施されている。以下では、発掘調査の成果を中心に概要する。

調査1では、現地表面から-1.6mで中世の柱穴、土坑、溝などを検出した⁷⁾。調査2では、江戸時代の旧高瀬川を検出したほか、各砂礫層上面で平安時代後期から江戸時代の遺構・遺物が確認されている。調査3では、江戸時代に付け替えられた御土居の土墨基底部を検出したが、堀を伴わず土墨裾部に沿って溝が検出された⁹⁾。調査4では、涉成園の造営後に付け替えられた高瀬川に伴う舟入と、江戸時代後期の整地層と建物跡を検出した¹⁰⁾。調査5では、調査3で検出した御土居南裾部の東西溝の延長を検出した¹¹⁾。

註

- 1) 山田邦和 「第3章 左京と右京」『平安京提要』 角川書店 1994年
- 2) 石田孝喜 「近世初期の洛中絵図に関する考察」(四)・(五)『月刊古地図研究』97号・98号 日本地図資料協会 1978年
- 3) 近藤章子 『平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-11 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2014年
- 4) 「4 史料近世1」『京都の部落史』 京都部落史研究所 1986年
「5 史料近世2」『京都の部落史』 京都部落史研究所 1988年
- 5) 前掲註4)
「京都柳原町史」『日本庶民生活史料集成 第十四巻 部落』三一書房 1971年
山本尚友「六条村小史」『柳原銀行とその時代』崇仁地区の文化遺産を守る会 1991年
- 6) 「上司進達綴」(「京都市編入町村文書」京都市歴史資料館蔵) 柳原銀行記念資料館第25回特別展 図録 2013年
- 7) 「VI試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成13年度』京都市文化市民局 2002年
- 8) 加納敬二・永田宗秀『平安京左京八条四坊七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-11 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 9) 前掲註3)
- 10) 近藤章子『平安京左京八条四坊九町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-11 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016年
- 11) 近藤章子『平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-12 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016年

第3章 1区の調査

1. 遺 構

(1) 基本層序 (図11)

調査区の南北両壁面は、攪乱により層序が良好な状態で遺存していなかったため、北断割部南壁の層序を取り上げて述べる。上から順に、地表面から0.28mまでは現代盛土である。第1・2層は石組溝1、第3・4層は近代以降の整地層、第5～8層は近代の整地層、第9～12層は石積み2造成土、第13層は石積み2掘形埋土、第18・19層は近世整地層、第20層は地山である。調査は、第3～5層上面を第1面、第5・9層上面を第2面として調査を行った。第2面は本来は第9層と第13・14層上面で検出すべきであるが、道路工事の掘削深度との関係から上記の検出面となった。これより下層については、部分的な断割調査により、近世の遺構を第18層上面で検出したことから第18層上面を第3面として調査を行った。

(2) 近代の遺構 (図版1・2・9)

石積み2 調査区中央部で検出した南北方向の石積みである。検出面での規模は、南北約30m、高さ約1.0～1.23mである。石積みの北端は攪乱により失われているが、本来は七条通まで続いていたと思われる。また南端も攪乱により失われている。

石積みは東面し、3～4石を積む。石材は、花崗岩の割石が多いが一部チャートも確認した。また礎石の転用もみられる。石積み基底部は、近世整地層を掘り込んで据えている(図11-13層、図12-12層)。また基底部より上の石には掘形はなく、裏込め部分は石と土を順次積んでいることがわかる(図11-9～12層、図12-7～11層)。

石組溝1 調査区東側で検出した南北方向の石組溝で、調査地東側の南北道路の旧西側溝である。検出面での規模は、南北約27.5m、幅約0.2m、深さ0.28mである。石は間知石を使用しており、溝の両側に1石を並べて据えるのみであり、石の大きさは、面の幅が約0.3～0.4m、奥行きが0.2～0.4mである。東護岸の石は調査区北部では検出していない。溝底に石は用いず、粘質細砂を叩き締めていた。

表1 1区遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
近世	水路4	
近代以降	石積み2、石組溝1(道路側溝)	

(3) 近世の遺構（図版10、図11・12）

水路4 調査区の南北2箇所で行った部分的な断割において検出した南北方向の水路の西肩部である。検出面での規模は、東西幅約0.8m以上、深さ約0.6mである。水路の埋土は、砂泥が堆積する。

水路の肩部において、杭跡を6箇所検出した。検出面での規模は、いずれも直径約0.06mで、深さは約0.1~0.32mである。杭跡は円形を呈する。北断割部で検出した杭は、南北方向に約0.3m間

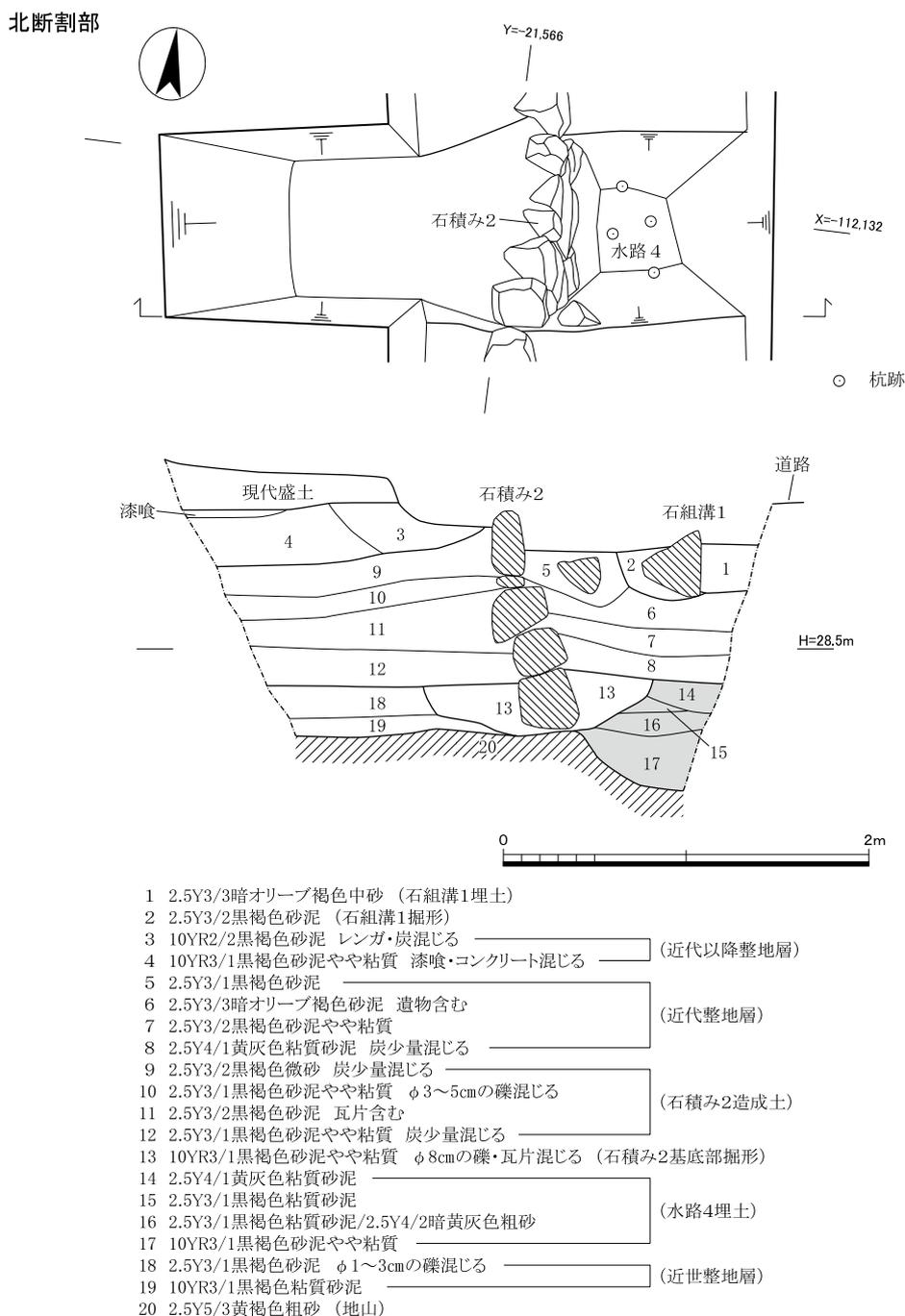
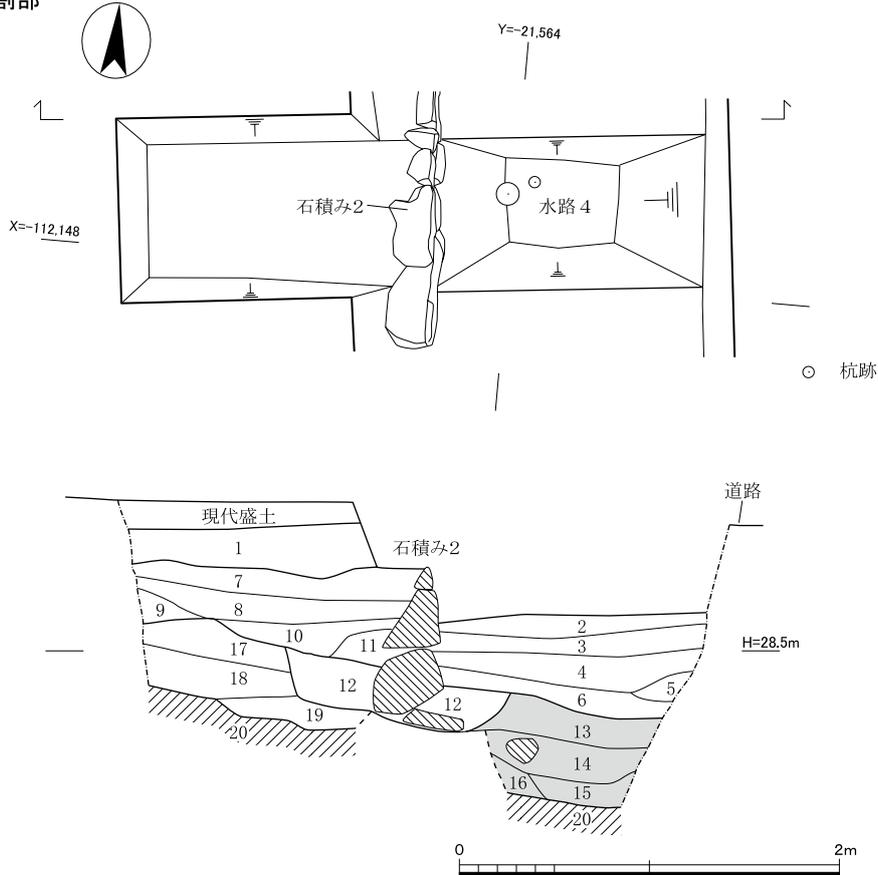


図11 1区北断割部実測図 (1:40)

南断割部



- | | | |
|----|---|---------|
| 1 | 10YR4/2灰黄褐色砂泥 瓦片少量含む (近代以降整地層) | |
| 2 | 2.5Y3/2黒褐色微砂 | 近代整地層 |
| 3 | 2.5Y4/1黄灰色粘質砂泥 | |
| 4 | 2.5Y4/1黄灰色微砂 炭微量混じる | |
| 5 | 2.5Y3/1黒褐色微砂 | |
| 6 | 2.5Y3/1黒褐色粘質砂泥 | |
| 7 | 2.5Y3/2黒褐色砂泥 | 石積み2造成土 |
| 8 | 10YR3/1黒褐色砂泥やや粘質 | |
| 9 | 2.5Y3/1黒褐色粘質砂泥 | |
| 10 | 10YR2/2黒褐色砂泥 | 水路4埋土 |
| 11 | 10YR3/1黒褐色砂泥 φ3~7cmの礫多量混じる | |
| 12 | 10YR3/1黒褐色粘質砂泥 φ3~7cmの礫多量混じる (石積み2底部掘形) | |
| 13 | 2.5Y3/3暗オリーブ褐色微砂 φ2~4cmの礫少量混じる | |
| 14 | 10YR3/3暗褐色微砂 φ13cmの礫混じる | 近世整地層 |
| 15 | 2.5Y3/1黒褐色微砂 | |
| 16 | 2.5Y3/2黒褐色微砂 φ5cmの礫混じる | |
| 17 | 10YR3/1黒褐色砂泥やや粘質 φ3~5cmの礫多量混じる | 地山 |
| 18 | 10YR3/1黒褐色砂泥 炭少量混じる | |
| 19 | 10YR3/1黒褐色粗砂 | |
| 20 | 2.5Y3/3黄褐色粗砂 | |

図12 1区南断割部実測図 (1 : 40)

隔であった。杭そのものは残存していない。杭跡の東側は地山が東方向に傾斜し、杭跡西側は地山直上に盛土をして平坦面を造成している (図11-18・19層)。傾斜部分に堆積する黒褐色砂泥にはラミナが認められる (図11-17層)。これらのことから、杭跡は水路に伴う護岸施設で、杭跡より東側が水路、これより西側が陸部であり、水路4は杭と板による護岸施設を設けた構造であったと考えられる。

2. 遺物

(1) 遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は、整理用コンテナに3箱である。出土遺物には陶器類・瓦類・ガラス製品・金属製品などがある。そのうち陶器類が大半を占め、次いで瓦類が多い。時期別では、明治時代から大正時代までのものが多い。

(2) 土器類 (図13)

1は染付の蓋である。2は染付の小椀である。藍色とえんじ色で文様が施される。3は染付の盃である。外面体部に凸線が巡る。外面に左から「が下」の文字、内面底部に二葉葵が描かれる。4は染付の猪口である。内面底部に文様が施される。高台は隅切方形を呈する。5は施釉陶器の椀である。釉の色調は灰オリーブ色を呈する。内面にトチン痕が3点残る。高台は削り出しによる成形である。6は施釉陶器の脚付き燈明皿受である。釉の色調は浅黄色を呈する。7は染付の蓋である。8は施釉陶器の燈明皿受で、内面のみ施釉される。釉の色調は灰オリーブ色を呈する。9は施釉陶器の燈明皿で、内面のみ施釉される。釉の色調は淡黄色を呈する。口縁部外面に煤が付着する。内面にトチン痕が3点残る。10は施釉陶器の急須蓋で、内面のみ施釉される。釉の色調は灰オリーブ色を呈する。11は染付の筒形椀である。

1・2は水路4埋土、3～6は石積み2基底部掘形、7は石積み2背面、8～10は近代整地層、11は石組溝1検出中にそれぞれ出土した。

(3) ガラス製品 (図13)

12～16はガラス瓶である。12は薬瓶または化粧瓶で、透明色を呈する。13は化粧瓶で、色調はコバルトブルー色を呈する。体部に「美顔水」と陽刻される。14・15は飲料水用の長頸の瓶で、体部には「みかん水」と陽刻される。16は飲料水用の瓶で、断面形が十角形を呈する。

12は石積み2基底部掘形、13は近代整地層上層、14は近代整地層、15は石組溝1掘形、16は石組溝1掘形からそれぞれ出土した。

表2 1区遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
近世	染付、軒瓦、瓦類		染付2点、軒平瓦1点、軒棧瓦1点、棧瓦1点		
近代以降	染付、施釉陶器、煉瓦、ガラス製品		染付4点、施釉陶器5点、煉瓦1点、ガラス製品5点		
合計		5箱	20点(1箱)	1箱	3箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

(4) 瓦類 (図13)

17は唐草文軒棧瓦である。瓦当部外区、顎部、平瓦凹凸部すべて横方向にナデを施す。18は唐草文軒平瓦である。顎部には横方向のナデを施す。19は棧瓦である。側面部に「谷尾善」との刻印が押される。20は煉瓦である。体面は格子状の圧痕が確認できる。また同じく体面に「ニトヤキ／三石耐火煉瓦株式会社」と陰刻される。

17は石積み2掘形、18、19は石積み2背面、20は表土からそれぞれ出土した。

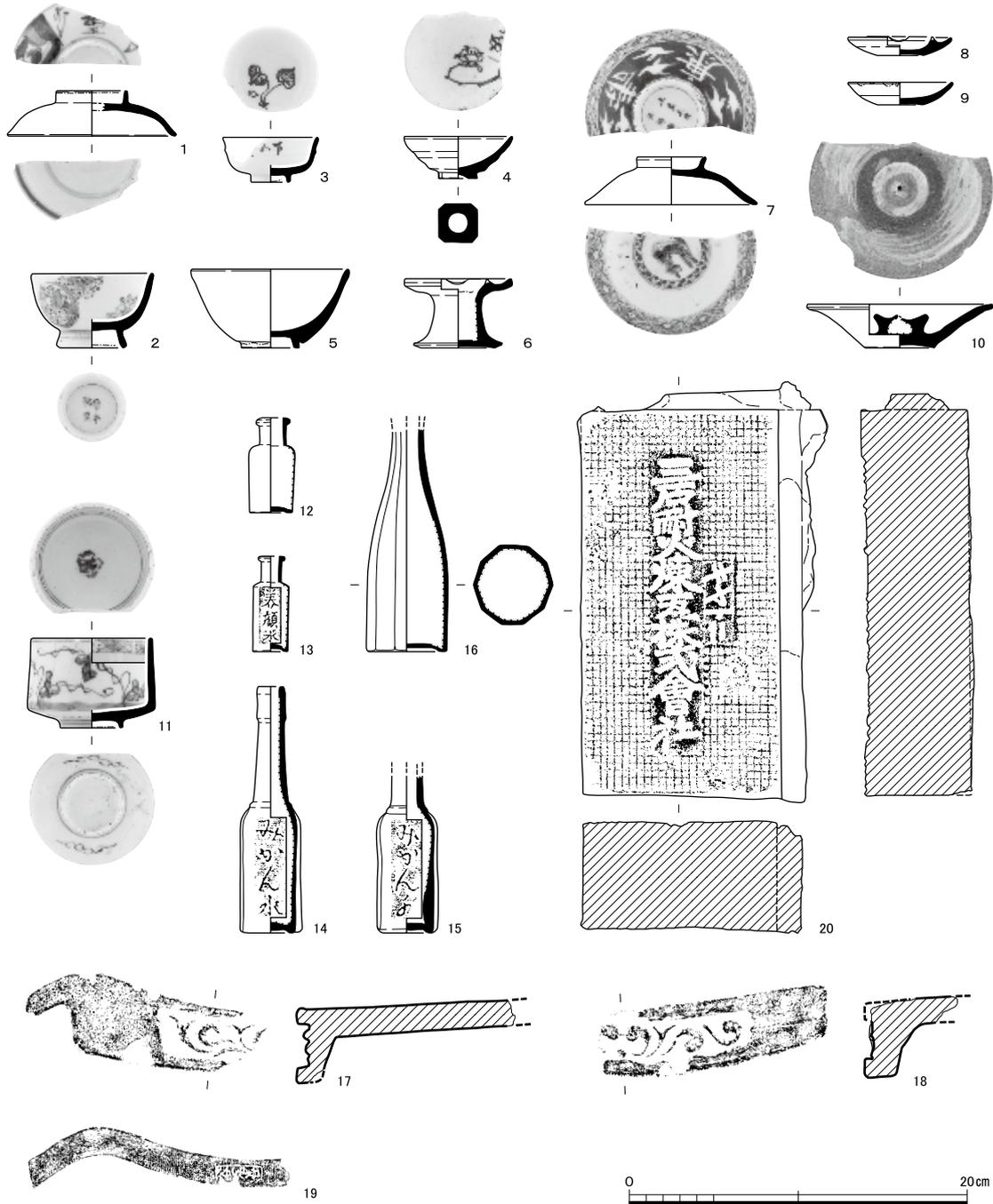


図13 1区出土遺物実測図及び拓影 (1 : 4)

第4章 2・3区の調査

1. 遺 構

調査地は、ほぼ平坦になっているが、東から西へわずかに下がっている。標高は29.2～29.6mであり、比高差は約0.4mである。

調査は、3面に分けて行った。第1面は江戸時代末期から明治時代の遺構面で、主な遺構には建物跡、井戸がある。第2面は江戸時代後期から末期の遺構面で、主な遺構には建物跡、収納施設、風呂、カマド、排水施設、井戸、水甕などがある。第3面は、第2面の居住面を形成するために行った造成の作業面として検出した。

(1) 基本層序 (図版6～8)

現地表面から2区では0.4mまで、3区では0.8mまでが現代盛土である。2区の北壁(Y=-21,546付近)で基本層序を述べる。現代盛土の下は江戸時代末期から明治時代初頭の遺構面(図版8-6層、第1面)である。その下には0.2～0.3mの厚さで焼土層が堆積する。禁門の変で被災した後の整地層である。さらにその下には江戸時代後期から末期の遺構面(図版8-17層、第2面)となる。その下は約0.2～0.35mの厚さで黒褐色シルトからなる江戸時代後期の造成の作業面(図版8-25層、第3面)を確認した。その下層は砂礫もしくはシルトの基盤層となる。基盤層上面の標高は28.8～28.9mである。

(2) 第1面の遺構 (図版3・11)

2・3区の西半部で4棟の建物跡を検出した。すべて礎石立ちの建物であり、方位は北に対して西に約4度振れる。建物の西側は調査区外に広がるため、全体は不明である。北から順に建物1・2・3・4とする。

建物1(図14) 間口2.82m以上、奥行7.52m以上ある。礎石は0.3～0.54mで、建物2～4に比べて大きい石を使用しており、平坦面を上にして据える。一部攪乱によって失われているが、約1.3～1.5m間隔で並んでいる。

建物2(図15) 間口4.9m、奥行7.92m以上ある。北側の礎石列は建物1と、南側の礎石列は建物3と共有していたと考えられる。

表3 2・3区遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
江戸時代後期 ～末期	建物5～8、井戸27・39、水甕57、カマド10・12、カマド状遺構13、排水施設40、収納施設29・30・43、土地造成21・46	第2・3面
江戸時代末期 ～明治時代初頭	建物1～4、井戸14・15	第1面

建物の南側に土間が位置し、幅0.9m、奥行4.32mある。非常に細かい黒色～黒褐色の砂を0.06m程度の厚さで突き固めている。土間が途切れた北側では礎石と思われる0.18～0.3mの河原石が約0.6～0.9m間隔で並んでおり、この部分から床貼りのある室内になると考えられる。

建物2の南寄りで漆喰製の溝を検出したが、南北方向の溝が北端で東西方向の溝と接続する。東西方向の溝は一度被災して作り替えた痕跡が認められる。室内で使用した水を屋外の東側へ流す

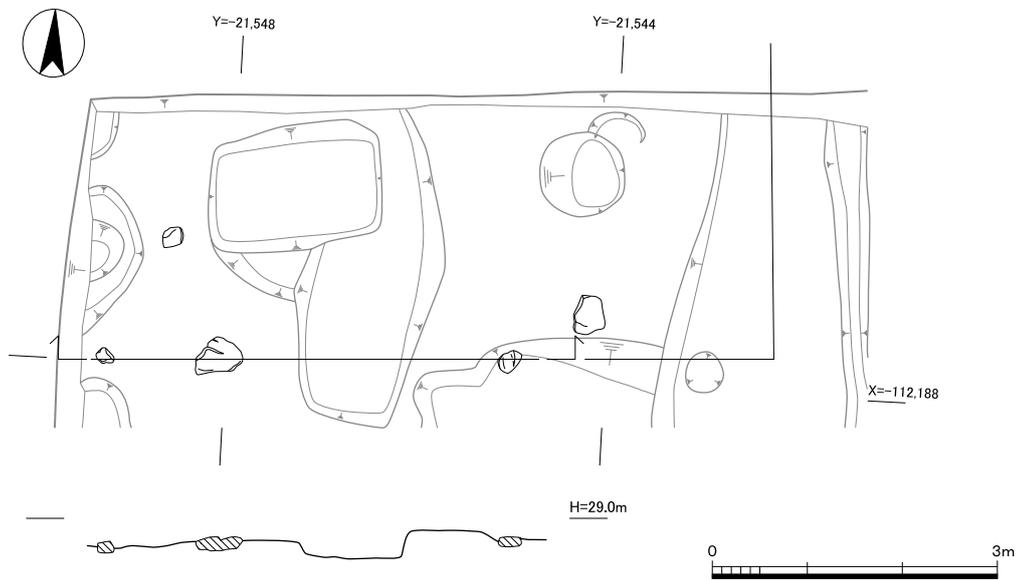


図14 建物1実測図(1:80)

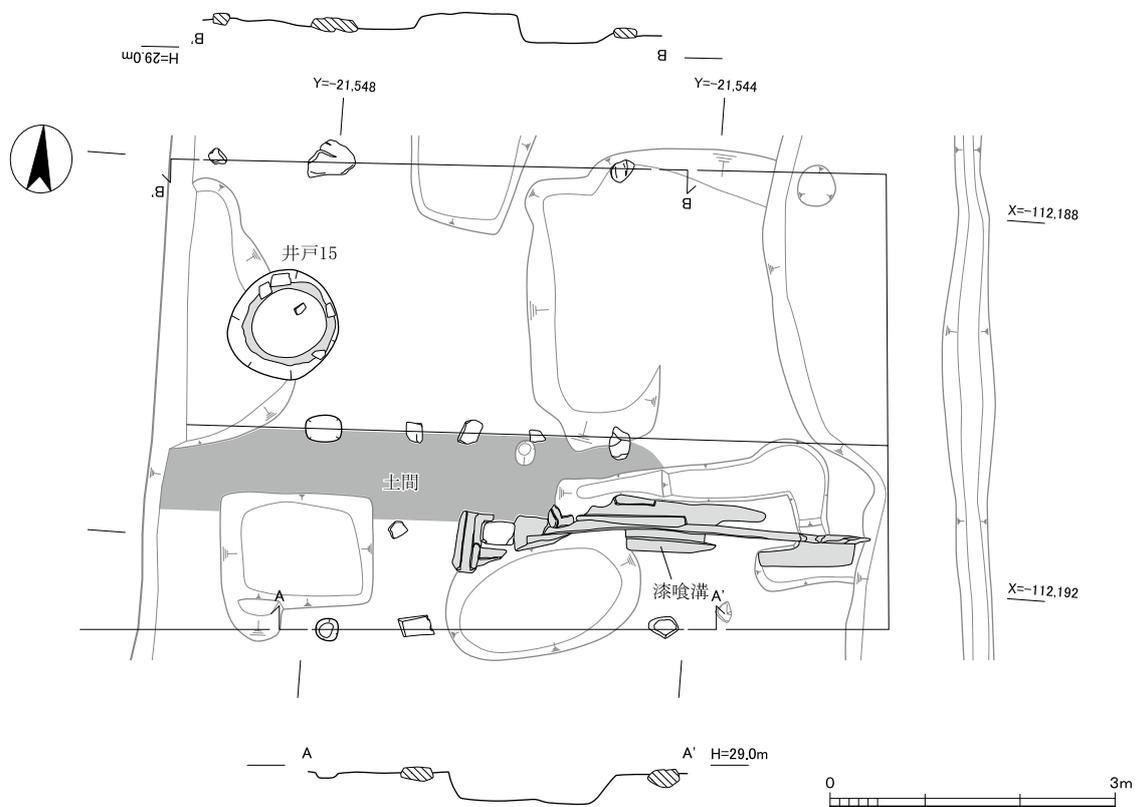


図15 建物2実測図(1:80)

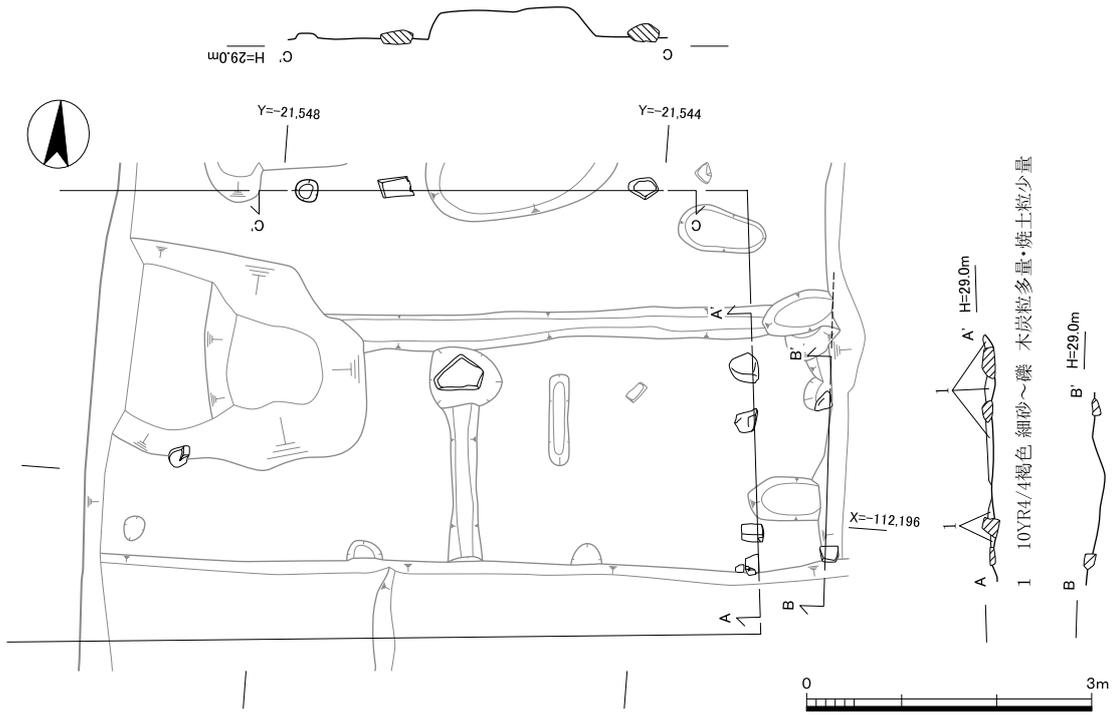


図16 建物3実測図 (1 : 80)

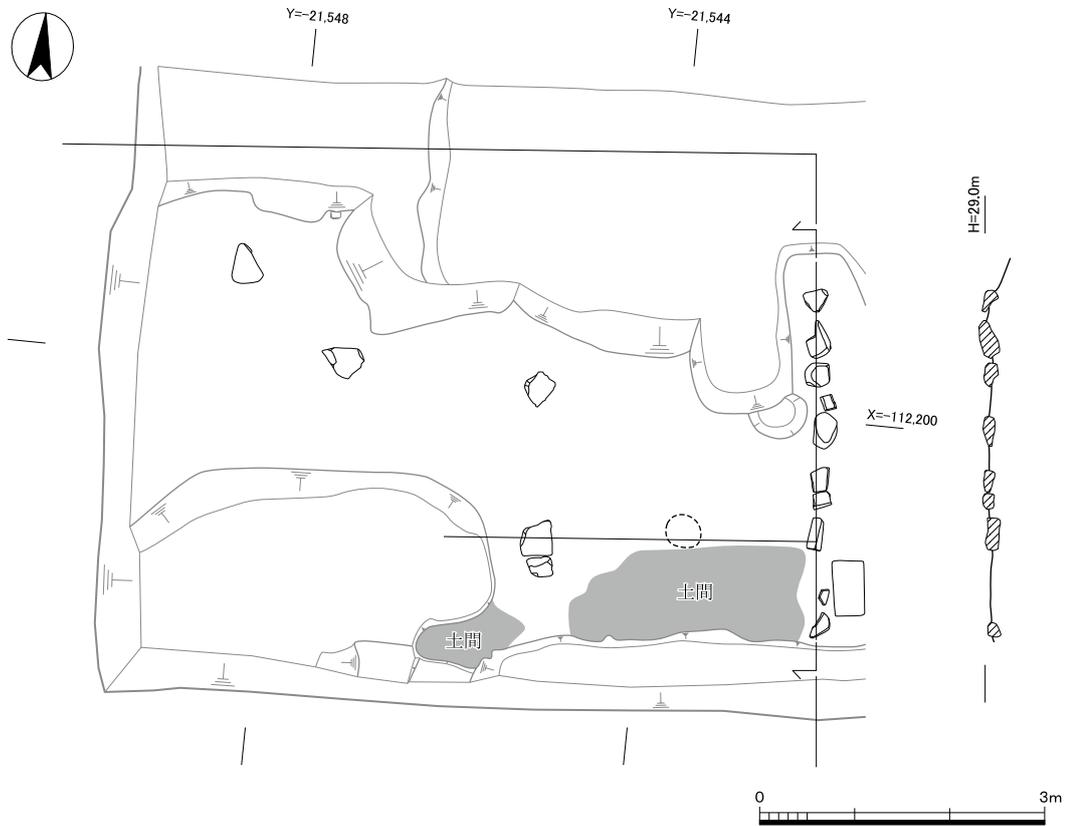


図17 建物4実測図 (1 : 80)

ように据えられたと思われる。また、土間の北側には多量の焼土で平らに整地しており、西側に井戸15を検出した。

建物3 (図16) 間口4.8m、奥行7.2m以上ある。北側の礎石列は0.3～0.32mの河原石と抜取り穴が約1.2m間隔で並んでおり、建物2と共有していたと考えられる。東側の礎石列は0.2～0.35mの河原石が約3.2～6.4m間隔で並んでいる。南側の礎石列は攪乱によって失われている。

また、東側の入り口には幅0.84mをさらに広げた位置に礎石列を検出した。出格子か駒寄せを設けた可能性がある

建物4 (図17) 間口6.0m以上、奥行7.2m以上ある。建物の南側に土間が位置し、幅1.0m、奥行4.1mで、黄色粘質土混じりの細かい砂を0.03m程度の厚さで固く突き固めている。東側の礎石列は、0.2～0.3mの河原石10個が約0.3～0.5m間隔で並んでいる。さらにその東側には、長方形の石を検出した。大きさは幅0.58m、奥0.32m、高さ0.1mであり、入り口の下に敷く踏み石と考えられる。

井戸14 (図18) 2区南東部で検出した円形の漆喰井戸である。掘形は径1.18m、井戸枠の規模は径0.9m、深さ1.0m以上である。埋土や掘形からガラス片と多量の瓦が出土した。明治以降に造られたものである。

井戸15 (図18) 2区西部で検出した円形の漆喰井戸である。建物2に伴うものと考えられる。掘形は径1.2m、井戸枠の規模は径0.92m、深さ1.1m以上である。井戸枠の上面には割れた平瓦4点が平らに載せられており、井戸枠の漆喰と付着している。

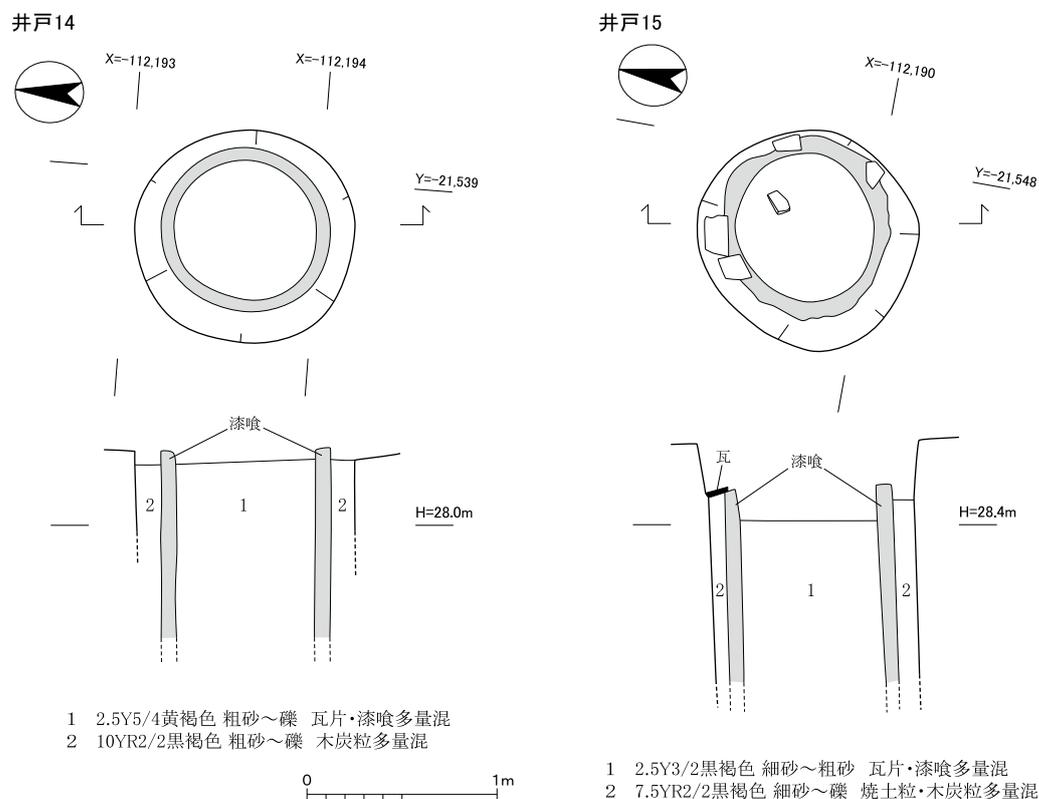


図18 井戸14・15実測図 (1:40)

(3) 第2面の遺構 (図版4・12)

2・3区の西半部で4棟の建物跡を検出した。建物の方位は北に対して西に約4度振れる。建物の西側は調査区外に広がるため、全体は不明である。北から順に建物5・6・7・8とする。すべて礎石立ちの建物であるが、火災の跡を示す多量の炭とともに、熱を受けて赤く変色し割れた礎石(図19)と、赤く焼けた土間を検出した。

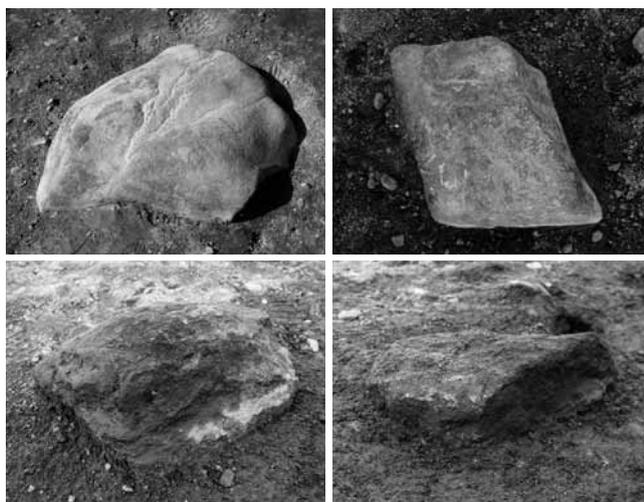


図19 被熱した礎石

建物5 (図20) 間口2.72m以上、奥行8.0m以上ある。建物の中央部に土間が位置し、幅2.1m、奥行5.7mある。細かい炭が多量に含まれた黒色～黒褐色の砂を0.06m程度の厚さで幾層にも叩き締めてある。土間が途切れた南側には礎石と思われる石が2個が0.96m間隔で並んでおり、建物6と共有していたと考えられる。礎石の中では大きさ0.4～0.7mの大きい石を使用しており、被熱した痕跡がある。

建物6 間口約5.4m、奥行8.4m以上ある。東側の礎石列は攪乱によって失われている。北・南側の礎石列は建物5・7と共有していたと考えられる。建物の東側に収納施設29とカマド10・12、南側に木枠の井戸27、西側に漆喰製の水槽36をもつ。

建物7 (図21) 間口4.0m、奥行7.2m以上ある。建物の北半に土間が位置し、幅2.5m、奥行4.8mある。細かい炭や黄色粘質土を多量に含まれた黒褐色の砂を0.02～0.05m程度の厚さで突き固め

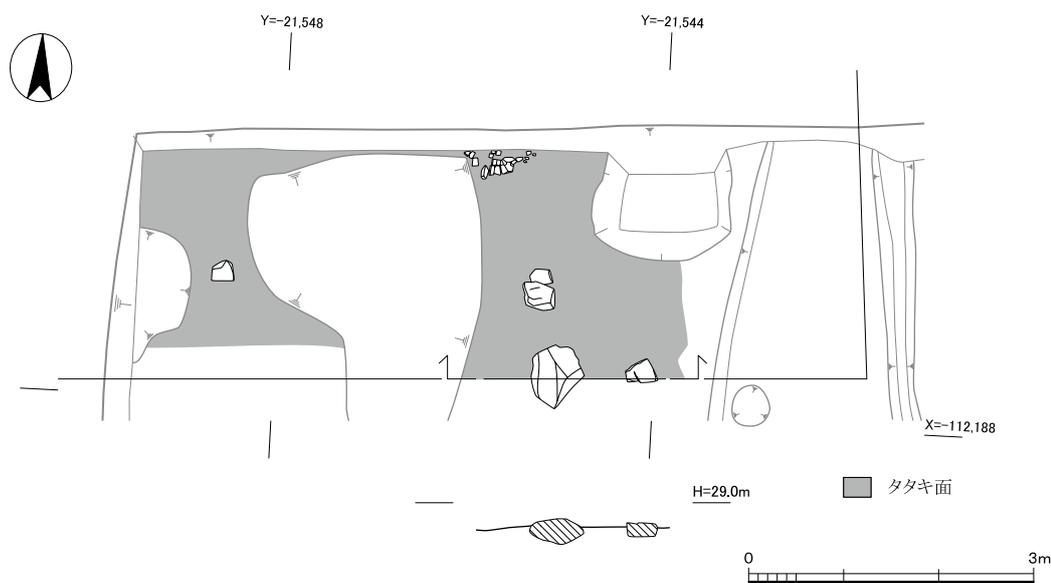


図20 建物5実測図 (1:80)

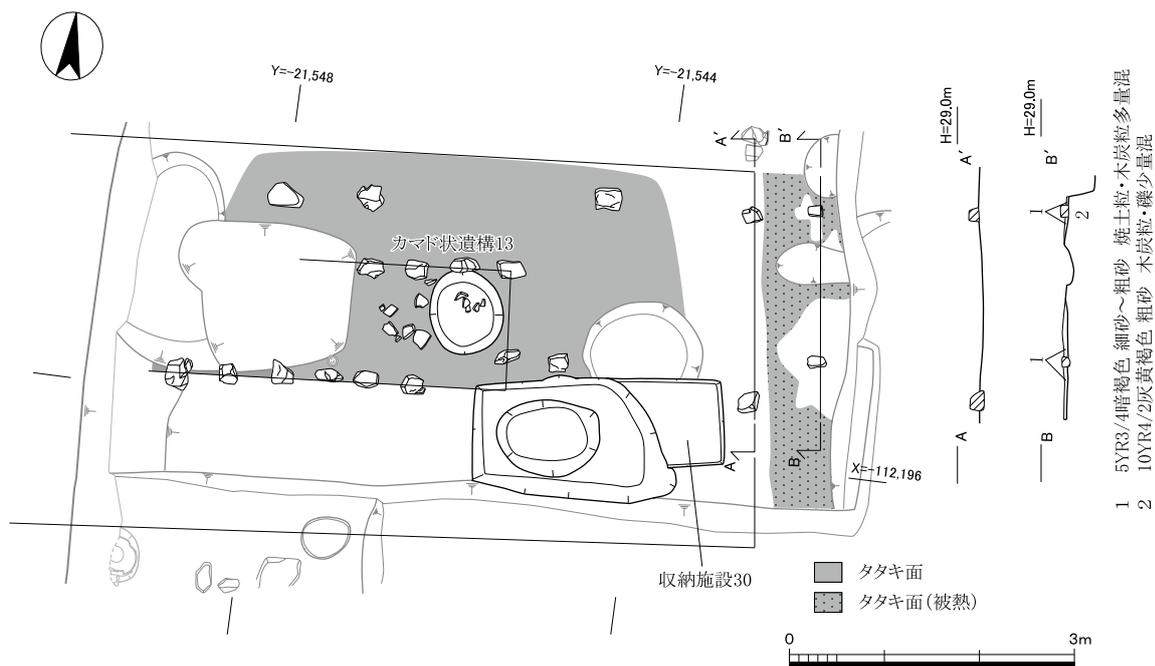


図21 建物7実測図 (1:80)

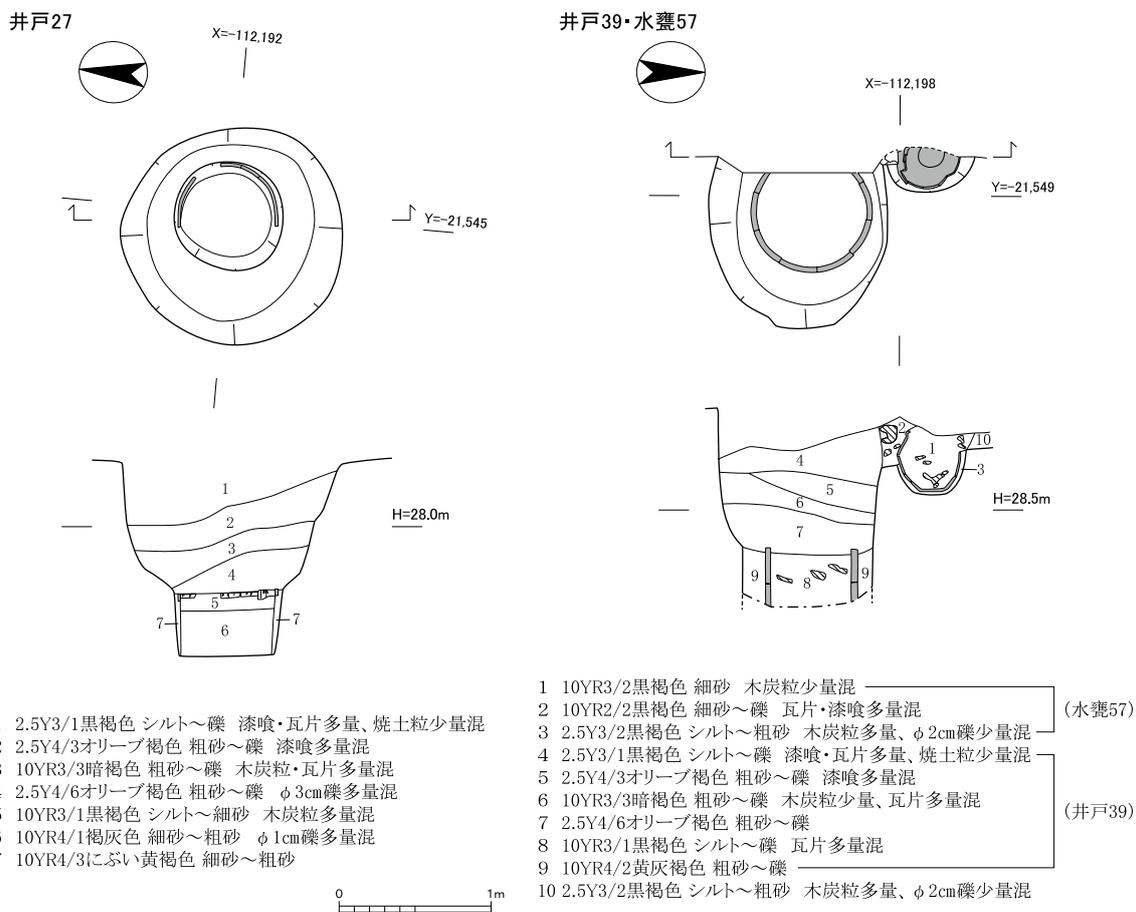


図22 井戸27、井戸39・水甕57実測図 (1:50)

である。土間の中央にはカマド状遺構13があり、土間が途切れた南側には0.25～0.3mの河原石6個、北側には4個が約0.6m間隔で並んでいる。

また東側の入り口には礎石列とともに幅0.9mで暗褐色に固く焼き締めたタタキが帯状になっている状況を検出した。出格子か駒寄せを設けた可能性がある。建物の東側に収納施設30を設ける。

建物 8 間口6.0m以上、奥行7.2m以上ある。土間は建物の中央部で検出し、幅0.7m、奥行6.6m、厚さは0.03mほどある。東側へ広がる土間が東側で途切れる地点に、固く焼き締めたタタキを幅1.1mほど検出した。入口と考えられる。建物の北半には、収納施設43とともに排水施設40に伴うものと思われる水甕57、井戸39、カマド58、集石45を設ける。

井戸 27 (図22) 2区中央部で検出した。底で円形の木枠の痕跡を確認した。掘形は径1.6m、深さ1.42mある。第4層までは掘り返されているが、木枠痕跡の遺存状態は悪く、直径約0.7m、深さは約0.06m残る。

井戸 39 (図22) 3区西壁際で検出した円形の瓦積み井戸で、一周9枚で構成される。掘形は径0.88m、井戸枠の規模は径0.62m、深さ1.1m以上ある。第7層まで掘り返されている。

水甕 57 (図22) 井戸39の北に接続し、西壁際で検出した。上部は削平され、据えられた信楽産大甕の下半部が残る。掘形の残存径は約0.46m、残存深さは0.40mある。埋土からは瓦の小片が

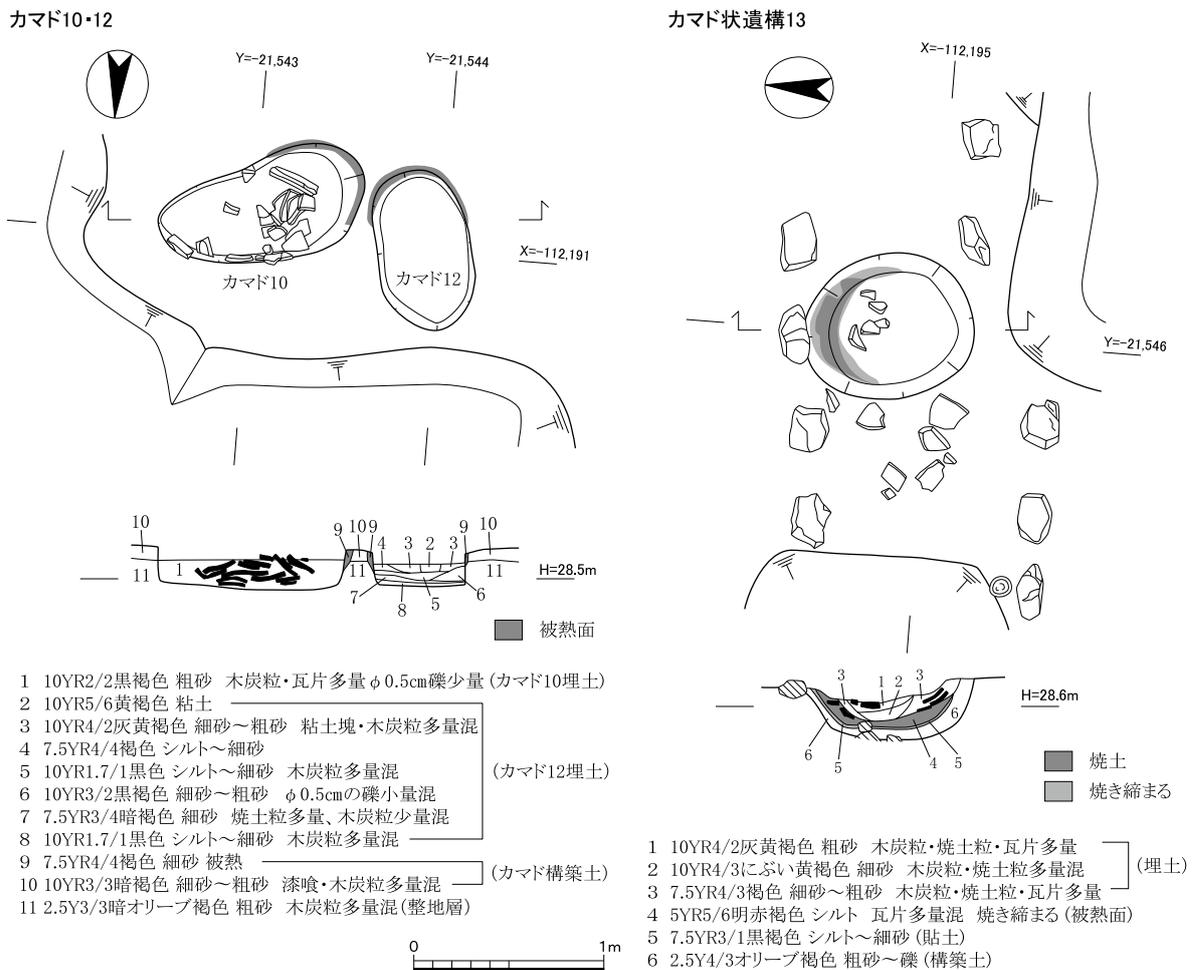
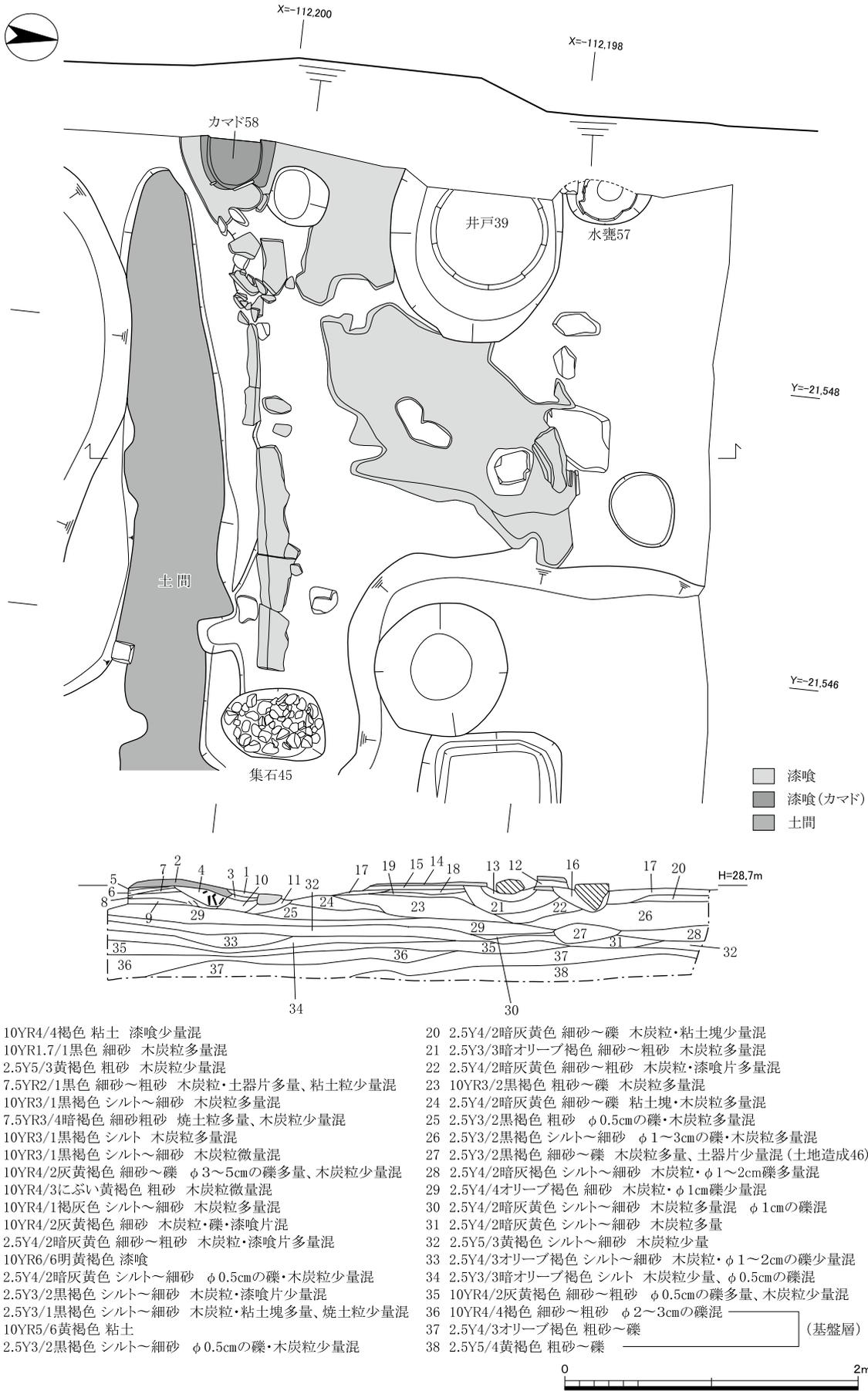


図23 カマド10・12、カマド状遺構13実測図(1:40)



- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 1 10YR4/4褐色 粘土 漆喰少量混 2 10YR1.7/1黒色 細砂 木炭粒多量混 3 2.5Y5/3黄褐色 粗砂 木炭粒少量混 4 7.5YR2/1黒色 細砂～粗砂 木炭粒・土器片多量、粘土粒少量混 5 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂 木炭粒多量混 6 7.5YR3/4暗褐色 細砂粗砂 焼土粒多量、木炭粒少量混 7 10YR3/1黒褐色 シルト 木炭粒多量混 8 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂 木炭粒微量混 9 10YR4/2灰黄褐色 細砂～礫 φ3～5cmの礫多量、木炭粒少量混 10 10YR4/3にぶい黄褐色 粗砂 木炭粒微量混 11 10YR4/1褐灰色 シルト～細砂 木炭粒多量混 12 10YR4/2灰黄褐色 細砂 木炭粒・礫・漆喰片混 13 2.5Y4/2暗灰黄色 細砂～粗砂 木炭粒・漆喰片多量混 14 10YR6/6明黄褐色 漆喰 15 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト～細砂 φ0.5cmの礫・木炭粒少量混 16 2.5Y3/2黒褐色 シルト～細砂 木炭粒・漆喰片少量混 17 2.5Y3/1黒褐色 シルト～細砂 木炭粒・粘土塊多量、焼土粒少量混 18 10YR5/6黄褐色 粘土 19 2.5Y3/2黒褐色 シルト～細砂 φ0.5cmの礫・木炭粒少量混 | <ul style="list-style-type: none"> 20 2.5Y4/2暗灰黄色 細砂～礫 木炭粒・粘土塊少量混 21 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 細砂～粗砂 木炭粒多量混 22 2.5Y4/2暗灰黄色 細砂～粗砂 木炭粒・漆喰片多量混 23 10YR3/2黒褐色 粗砂～礫 木炭粒多量混 24 2.5Y4/2暗灰黄色 細砂～礫 粘土塊・木炭粒多量混 25 2.5Y3/2黒褐色 粗砂 φ0.5cmの礫・木炭粒多量混 26 2.5Y3/2黒褐色 シルト～細砂 φ1～3cmの礫・木炭粒多量混 27 2.5Y3/2黒褐色 細砂～礫 木炭粒多量、土器片少量混(土地造成46) 28 2.5Y4/2暗灰褐色 シルト～細砂 木炭粒・φ1～2cm礫多量混 29 2.5Y4/4オリーブ褐色 細砂 木炭粒・φ1cm礫少量混 30 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト～細砂 木炭粒多量混 φ1cmの礫混 31 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト～細砂 木炭粒多量 32 2.5Y5/3黄褐色 シルト～細砂 木炭粒少量 33 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト～細砂 木炭粒・φ1～2cmの礫少量混 34 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 シルト 木炭粒少量、φ0.5cmの礫混 35 10YR4/2灰黄褐色 細砂～粗砂 φ0.5cmの礫多量、木炭粒少量混 36 10YR4/4褐色 細砂～粗砂 φ2～3cmの礫混 37 2.5Y4/3オリーブ褐色 粗砂～礫 38 2.5Y5/4黄褐色 粗砂～礫 |
|--|---|

図24 排水施設40実測図 (1 : 40)

出土した。

カマド10・12 (図版13、図23) 2区中央北寄りで見出したカマド2基である。建物6に伴うものと考えられる。両方とも被熱面の範囲が帯状の半円形になっており、本来の規模や上部構造は不明であるが、東西列に並んでいたと考えられる。カマド10の埋土から多量の瓦が出土したが、カマド12には褐色から黒褐色のシルト質砂や木炭粒が堆積する。

カマド状遺構13 (図版13、図23) 2区南部で、床面の被熱部分と掘形を見出した。建物7に伴うものと考えられる。平面形は円形と考えられ、検出規模は、径0.9mで、深さは検出面から約0.28mある。据えられている2列の石列のうち、西側の石が強く被熱していることや、西側に焼けた瓦片や焼土が広がっていることから、西側に焚口が開くと考えられる。埋土から二次焼成を受けた瓦片が多量出土した。五右衛門風呂の可能性はある。

排水施設40 (図24) 3区西部で見出した漆喰貼りの排水施設である。南側は攪乱を受け、遺構の西側は調査区外に広がるため全体的な規模は不明である。平面形は不正形で、検出範囲は東西3.6m以上、南北2.6m以上ある。北側はほぼ平坦に作るが、径約0.3mの石を1石、径約0.5mの石を1石、平坦面を上にして据える。南側に長さ約3.0mの溝が取り付け、東側へ水を流せるようになっている。その先端には集石45が取り付く。検出規模は東西0.5m、南北0.72m、深さは最大0.28mで、径0.03～0.12mの石が詰まる。

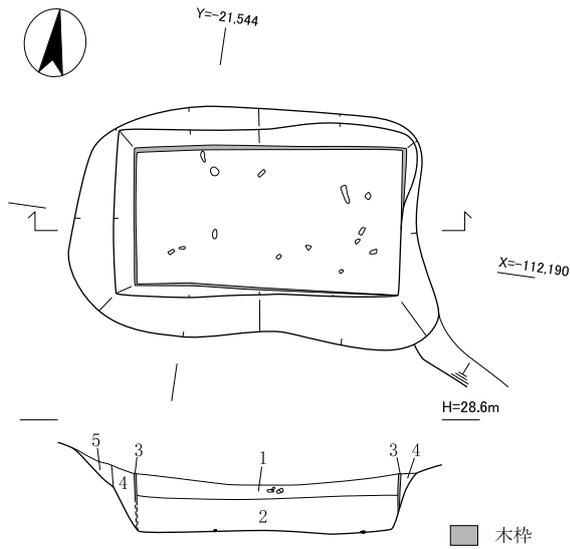
断面観察から、南側の土間と排水施設40は土地造成とともに一連の作業工程で施工されたものと考えられる。厚さ0.05m前後の単位で水平にシルト細砂層と炭層を交互に積み上げたのち、土手状の土間を敷き、漆喰を貼り、溝を据える。最後に土間と溝の間に粘土で固めているのも確認できた。カマド58・井戸39・水甕57が取り付けられていることから、おそらく風呂関連施設に伴う排水施設である可能性もあると考える。

収納施設29 (図版13、図25) 2区中央で見出した。平面長方形の土坑である。東側はやや削平を受ける。建物6に伴うものと考えられる。掘形の検出規模は、東西1.64m、南北1.2mある。厚さ0.4m程度の木枠が長方形の四面で見出されたが、南東側の隅部は残っていない。木枠の残存規模は、東西1.40m、南北0.78m、深さは検出面から0.18mある。最下層の床土には鉄釘の小片がわずかに出土したのみである。

収納施設30 (図版13、図25) 2区中央南部で見出した。平面長方形の収納施設30が、土坑24により西側の2/3程度掘り返されている。収納施設30の検出規模は、東西長さ2.68m、南北幅0.92m、深さは検出面から0.54mある。最下層の床土には粘質粘土で貼られているが、壁際の構造は不明である。収納施設の埋土から江戸時代後期から末期までの遺物が多量に出土した。

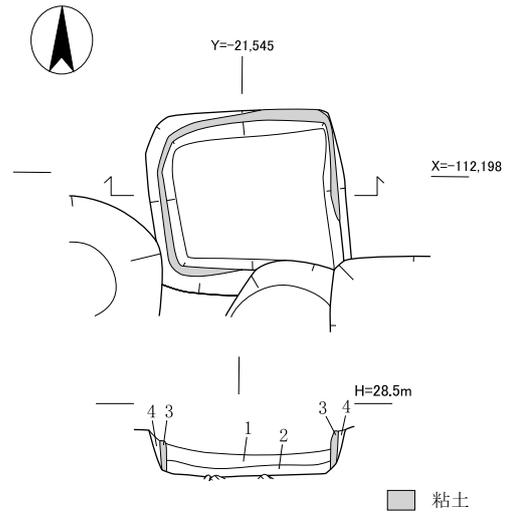
収納施設43 (図25) 3区北西部で見出した。平面方形の土坑である。残存東西幅は約1.04m、南北長さは約0.86mある。掘形の壁はほぼ垂直に近い角度で立ち上がり、壁際には粘質粘土が貼り付き、板壁構造になっていたと考えられる。深さは検出面から約0.22mあり、最下層の床土には鉄釘の小片がわずかに出土したのみである。建物8に伴うものと考えられる。

収納施設29



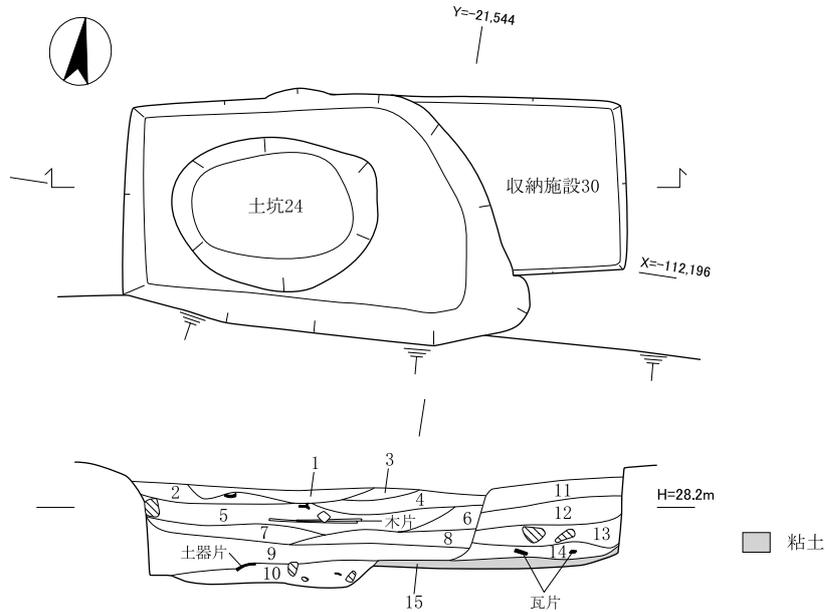
- 1 7.5YR3/2黒褐色 シルト 木炭粒多量混
- 2 2.5Y4/1黄灰色 細砂～礫 鉄釘多量混
- 3 10YR1.7/1黒色 木枠
- 4 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト～細砂 木炭粒多量、粘土塊少量混
- 5 2.5Y3/2黒褐色 シルト～細砂 木炭粒・焼土粒・粘土塊・礫少量混

収納施設43



- 1 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト～礫 木炭粒少量混
- 2 2.5Y5/3黄褐色 細砂～粗砂 φ2cmの礫・鉄釘少量混
- 3 2.5Y7/6明黄褐色 粘質粘土
- 4 2.5Y3/2黒褐色 細砂～粗砂 φ1～2cmの礫多量混

収納施設30



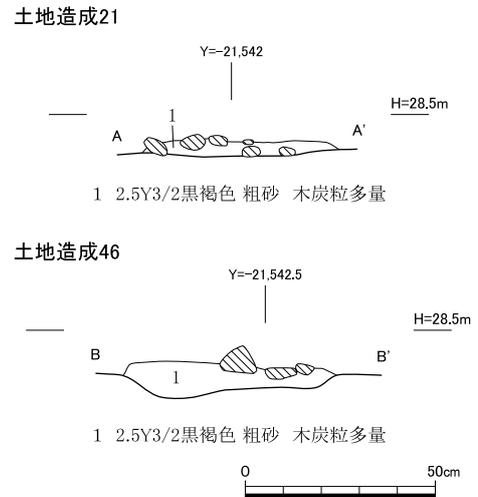
- | | | | |
|---|--------|---|----------|
| <ul style="list-style-type: none"> 1 2.5YR3/2黒褐色 シルト 木炭粒・焼土粒・φ0.5cm礫少量混 2 10YR4/3にぶい黄褐色 粗砂 木炭粒少量混 3 10YR4/3にぶい黄褐色 粗砂 木炭粒少量混 2と同一 4 10YR4/2灰黄褐色 粗砂 漆喰片・木炭粒・φ5cm小石少量混 5 10YR3/2黒褐色 細砂～礫 漆喰片・木炭粒・土器片多量 6 2.5Y4/2暗灰黄色 粗砂 漆喰片・木炭粒少量混 7 2.5Y3/2黒褐色 粗砂 木炭粒少量混 8 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト～粗砂 木炭粒・焼土粒少量混 9 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 粗砂 φ0.5cm礫・土器片少量混 10 10YR3/2黒褐色 細砂～粗砂 木炭粒・φ3～5cm礫少量 | (土坑24) | <ul style="list-style-type: none"> 11 2.5Y5/2暗灰黄色 粗砂～礫 土器片・木炭粒少量混 12 10YR5/2灰黄褐色 粗砂～礫 土器片・木炭粒・焼土粒多量 13 10YR3/2黒褐色 粗砂 φ3cmの小石多量、木炭粒少量混 14 2.5Y4/2暗灰黄色 細砂～粗砂 瓦片多量、粘土塊少量混 15 2.5Y4/4オリーブ褐色 粘質粘土 10YR3/3暗褐色細砂混 | (収納施設30) |
|---|--------|---|----------|



図25 収納施設29・30・43実測図 (1:40)

(4) 第3面の遺構 (図版5・14)

土地造成21・46 (図26) 2・3区全域で確認した。造成土 (図版6・7-57~61層、図版8-25~28層) は、厚さ約0.3~0.45mを測るが、その上に構築されている。2・3区の南北2箇所、畝状の造成単位を検出した。2区の土地造成21は、東西に伸びてから南北へ垂直に曲がり、径約0.05~0.1mの石が詰まる。検出規模は東西7.8m、南北4.7m以上あり、幅0.5~0.7mあり、深さは0.04~0.15mほどある。南北に伸びる部分は攪乱により削平を受けているが、さらに北へ延びる可能性が高い。3区の土地造成46は、ほぼ正方形に曲がっているのを確認したが、南側は調査区外に伸びるため、全体規模は不明である。検出規模は、東西5.6m、南北5.7m以上、幅0.3~0.62mある。深さは0.03~0.05mほどある。



※ A-A'・B-B'は図版5に対応

図26 土地造成21・46実測図 (1 : 20)

2. 遺物

(1) 遺物の概要 (表4)

調査では、整理用コンテナに41箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器・陶磁器類、土製品、瓦類、金属製品、石製品、骨・貝類などがある。全体の約9割を土器・陶磁器類が占める。遺物の時期は江戸時代後期から昭和時代までのものがあり、江戸時代末期のものが最も多い。

土器・陶磁器類には土師器、土師質土器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、磁器などがある。土製品には伏見人形、泥面子、埴塙など、瓦類には軒棧瓦、棧瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、井戸瓦など、石製品には硯、砥石、軽石など、金属製品には銭貨、釘、鋏、煙管など、そのほか獣骨、貝類などがある。細片のものは図示していない。

以下では、主要な遺構から出土した遺物について種別に概要を述べる。

(2) 土器類 (図27)

井戸27出土土器 (1) 1は肥前系磁器の染付椀である。内外面に輪宝文が施される。

井戸39出土土器 (2～5) 2は土鈴である。先端部に穴が貫通する。3は施釉陶器の土瓶の蓋である。蓋の外面には暗褐色の鉄釉が全面に施されるが、内面には無釉であり、糸切痕が残る。4は施釉陶器の小椀である。二次被熱を受ける。5は瀬戸・美濃系磁器の染付椀である。口縁端部には口紅と呼ばれる鉄釉が巡る。2～4は埋土の下層から、5は上層から出土した。

カマド12出土土器 (6・7) 6は肥前系磁器の染付椀である。外面には型紙絵付けによる文様が残る。7は土師質土器の「目皿」、もしくは「さな」と呼ばれる焜炉類の部品である。

カマド状遺構13出土土器 (8・9) 8は肥前系白磁の紅皿である。貝殻状に型押し成形されたもので、高台無釉である。9は京・信楽系施釉陶器の筒形椀である。8は埋土、9は構築土から出土した。

排水施設40出土土器 (10～12) 10・11は肥前系磁器の染付である。10は仏飯器、11は瓶である。12は京・信楽系施釉陶器の土瓶である。

表4 2・3区遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
江戸時代	土師器、須恵器、施釉陶器、焼締陶器、染付、磁器、土製品、瓦類、石製品、金属製品、骨・貝類		土師質土器2点、施釉陶器8点、染付11点、白磁2点、土製品1点、軒棧瓦2点：計26点		
明治時代以降	染付、施釉陶器、煉瓦、ガラス、銭貨		施釉陶器1点、白磁1点、磁器1点：計3点		
合計		44箱	29点 (2箱)	1箱	41箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より3箱多くなっている。

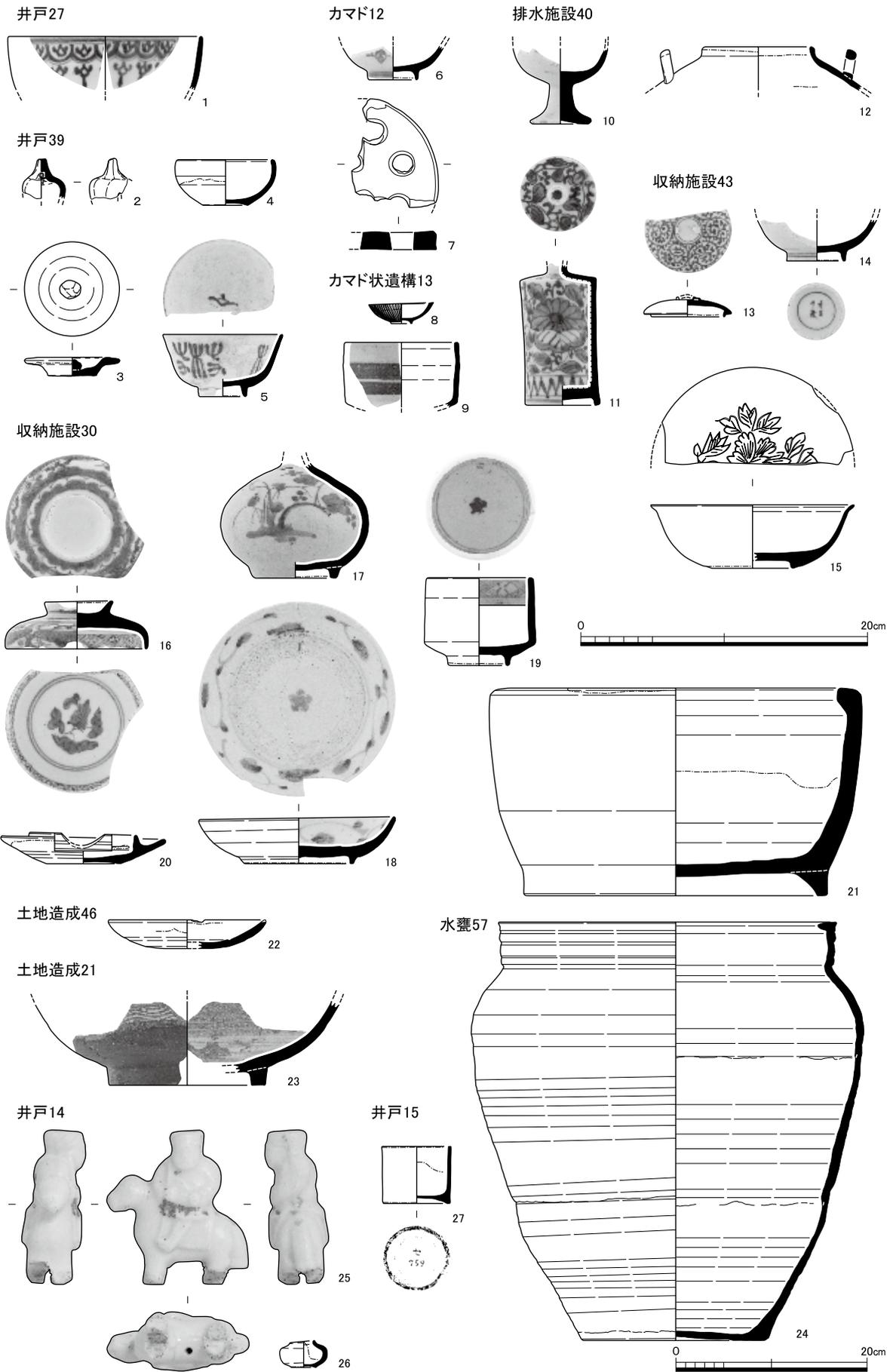


図27 2・3区出土土器類実測図(1:4、24のみ1:6)

収納施設43出土土器（13～15） 13は肥前系磁器の染付蓋であるが、口径6.0cmの小型である。14はいわゆる「くらわんか茶椀」で、高台内に「大明年製」の字款がある。15は白磁の皿である。底部内面には草花文が陰刻されている。

収納施設30出土土器（16～21） 16～18は肥前系染付である。16は蓋、17は香油壺である。18は蛇ノ目釉剥ぎ高台の皿で、内面に手書きによる文様が描かれている。19は青磁染付の筒形椀で、見込みの五弁花はコンニャク印判による施文である。20は京・信楽系施釉陶器の燈明皿である。21は土師質土器の火鉢で、内面上部に煤や鉄成分の不純物が付着する。

土地造成46出土土器（22） 22は施釉陶器の皿である。内面の体部の底部の境に圈線をもつ。明赤褐色の釉薬が全面に施されており、口縁には煤が付着することから、燈明皿としても使用されたとみられる。

土地造成21出土土器（23） 23は唐津産の大型鉢である。内外面とも白泥による刷毛目文が施される。

水甕57出土土器（24） 24は信楽産の水甕である。底部外面を除き全面に鉄釉が施されているが、内面の上半には水垢とみられる不純物が付着する。

井戸14出土土器（25・26） 25は瀬戸産磁器の人形で、型成形で作られている。軍帽をかぶり抜刀した人物が騎乗している姿を表している。底部に空気抜きの穴が開いている。26は白磁のミニチュア壺である。いずれも井戸の埋土から出土した。

井戸15出土土器（27） 27は施釉陶器で外面の全面に釉が施されており、底部の外面には統制番号の「セ759」が確認される。用途は不明である。

（3）瓦類（図28）

カマド10出土瓦（28） 28は軒棧瓦である。軒丸部は右卷三巴文で、頭・尾は離れ、外縁に珠点13個ある。軒平部は外行2転半唐草文で、中心文は3葉文である。燻瓦である。

井戸27出土瓦（29） 29は唐草文軒棧瓦である。外行3転唐草文で、中心文は3葉文の下に珠点が施される。瓦当部外区、顎部には横方向にナデを施し、平瓦部の凹凸面には縦方向のナデを施した後、横ナデで調整する。燻瓦である。

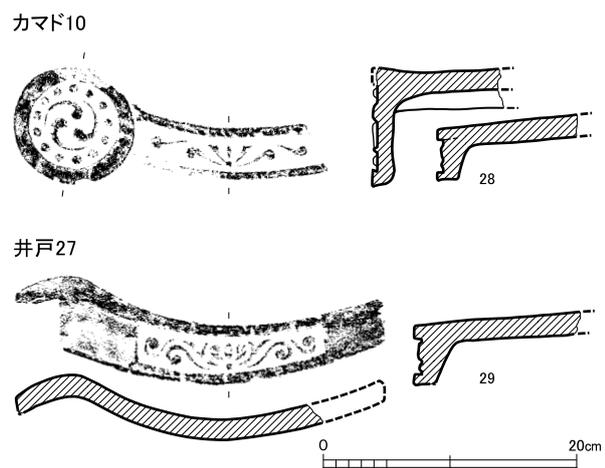


図28 2・3区出土瓦拓影及び実測図（1：6）

第5章 ま と め

今回の調査では、1区で近世以降の内浜と高瀬川を繋ぐ水路に関わる遺構、2・3区で江戸時代後期から昭和時代初頭までの宅地に関わる遺構を検出した。最後に、調査区に分けてその成果をまとめたい。

1区

今回検出した水路4は、埋土の遺物から近世に構築されたものと考えられる。水路4の杭跡列西側の盛土上面から杭跡列東側の斜面底部の比高差は約0.6mである。平成27年度に今回の調査地点から南東約130mの地点で行われた発掘調査（図1－調査4）では、舟入を検出している¹⁾。この舟入の深さも約0.6mであり、今回検出した水路4と同一である。このことから川舟の運行に必要な水路の深さがわかる。今回検出した水路4の東肩部では、杭跡列のみ検出したが、横板を杭によって固定させていたと考えられる。

近代になると水路4が埋まり、水路の西肩に近世整地層、水路堆積土を掘り込んで石積み基底部を据え、石積み2を構築する（図11－13層）。石積み2背面の造成土は、石を1石積み上げるごとに土を積んでいる（図11－9～12層）。この造成は、水路4西側で宅地造成が行われた結果と考えられる。その時期は、高瀬川の水運機能が停止した大正9年（1921）以降であろう。

近代以降から昭和時代になると、宅地造成によって構築された石積みに対し、埋まった水路は一段低くなっていたと考えられ、この段差を解消するため石積み2以東も嵩上げ、整地されたと考えられる（図11－5～8層）。その後に通した南北道路に伴う側溝が石組溝1である。この石組溝1は、平成27年度に実施した調査（図1－調査5）で検出した南北石列の北延長部にあたる²⁾。

水路の東肩を特定することが、今後の調査の課題である。

2・3区

江戸時代後期から昭和時代初頭までの整地層とそれに伴う建物を検出した。全体の配置は、西側を一画として、南北方向に並んで密に建物を配置している。明治4年（1871）の『六条村絵図』³⁾（図29）には、当時の街路と宅地割が描かれ、個々の宅地の家主が記されている。それによると、建物2と3の間口は2間半（約5m）と記されている。これは調査で検出した建物跡の間口の幅とほぼ一致しており、1間の幅は約2m（六尺五寸）を測り、いわゆる「京間」であることがわかった。おそらく調査区の東半が攪乱によって失われていることも、絵図で確認されるように街道で画しているためと考えられる。

また、五条－六条間の鴨川河原付近に存在した六条村は、宝永4年（1707）に領主である妙法院から移転を命じられ、調査地周辺に移る。六条村は、公役である刑警吏と皮革業という安定した仕事を持ち、村は庄屋にあたる年寄により厳しい統制がされていた。移転にあたり村から出した条件の中には、移転先が窪地で水が付きやすいため、3尺の地上げを行うことが挙げられており、そのため妙法院が土入れを行ったことが史料に記されている⁴⁾。

調査区で検出した江戸時代後期の造成土は、厚さが3尺には満たないが、一定の高さごとに木炭

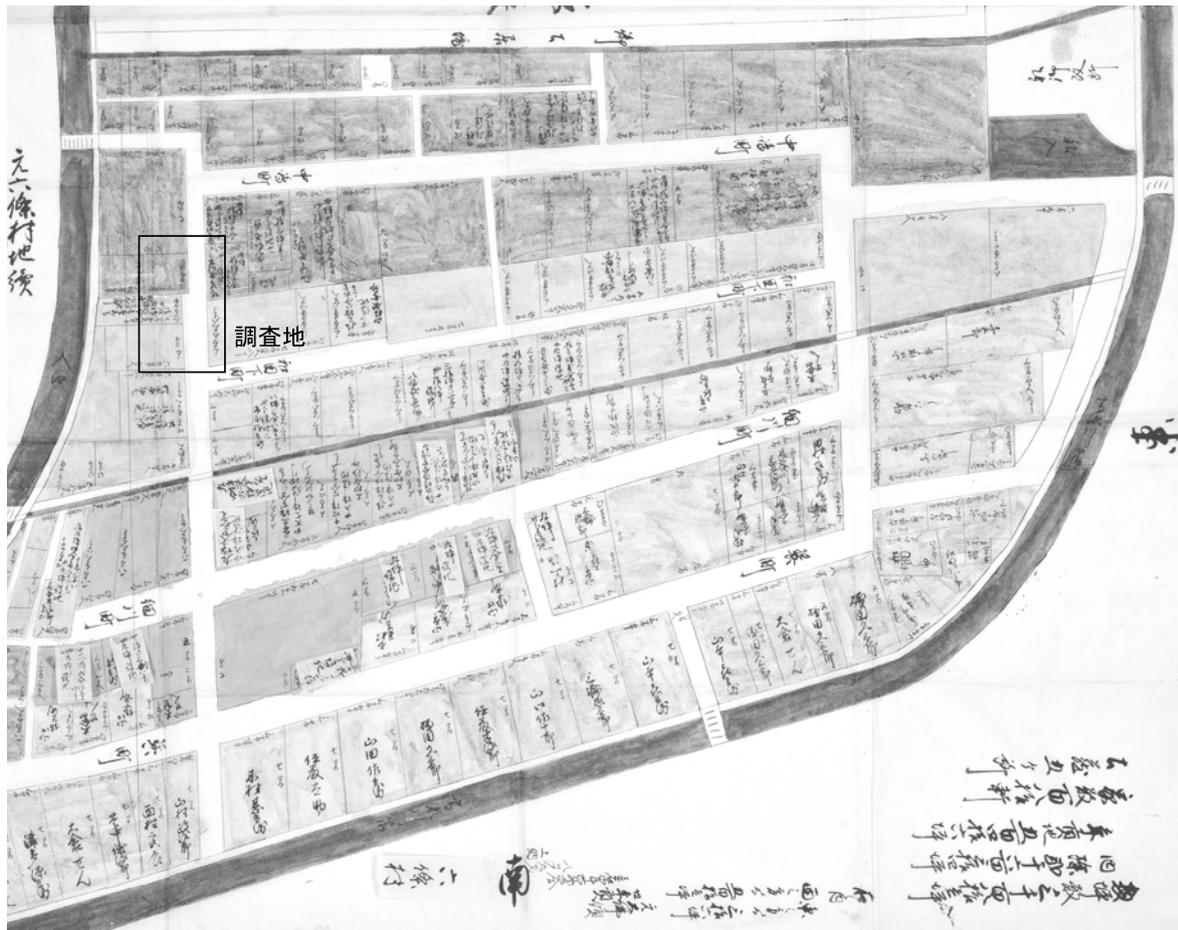


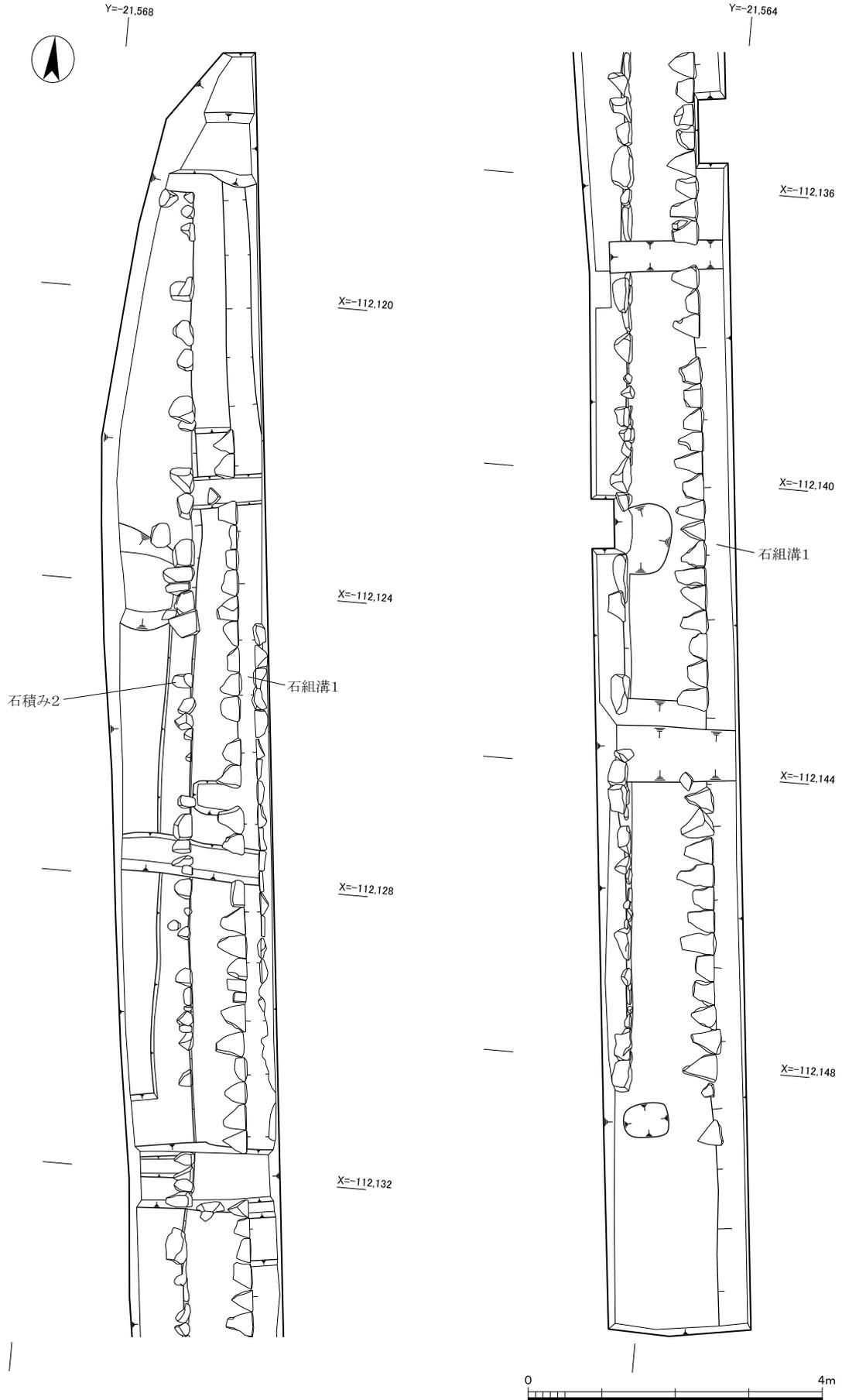
図29 明治4年の『六条村絵図』と調査地（2・3区）

粒を多量に入れていることが確認されており、造成土の上面で畝状の造成単位を2箇所検出した。いずれも、排水性を意識した土地造成と考えられ、手の込んだ作業が行われたことがわかる。当時、このような土地造成が調査地周辺で大々的に計画的に行われたかどうかは、調査や資料の増加を期待しながら今後の課題としたい。

註

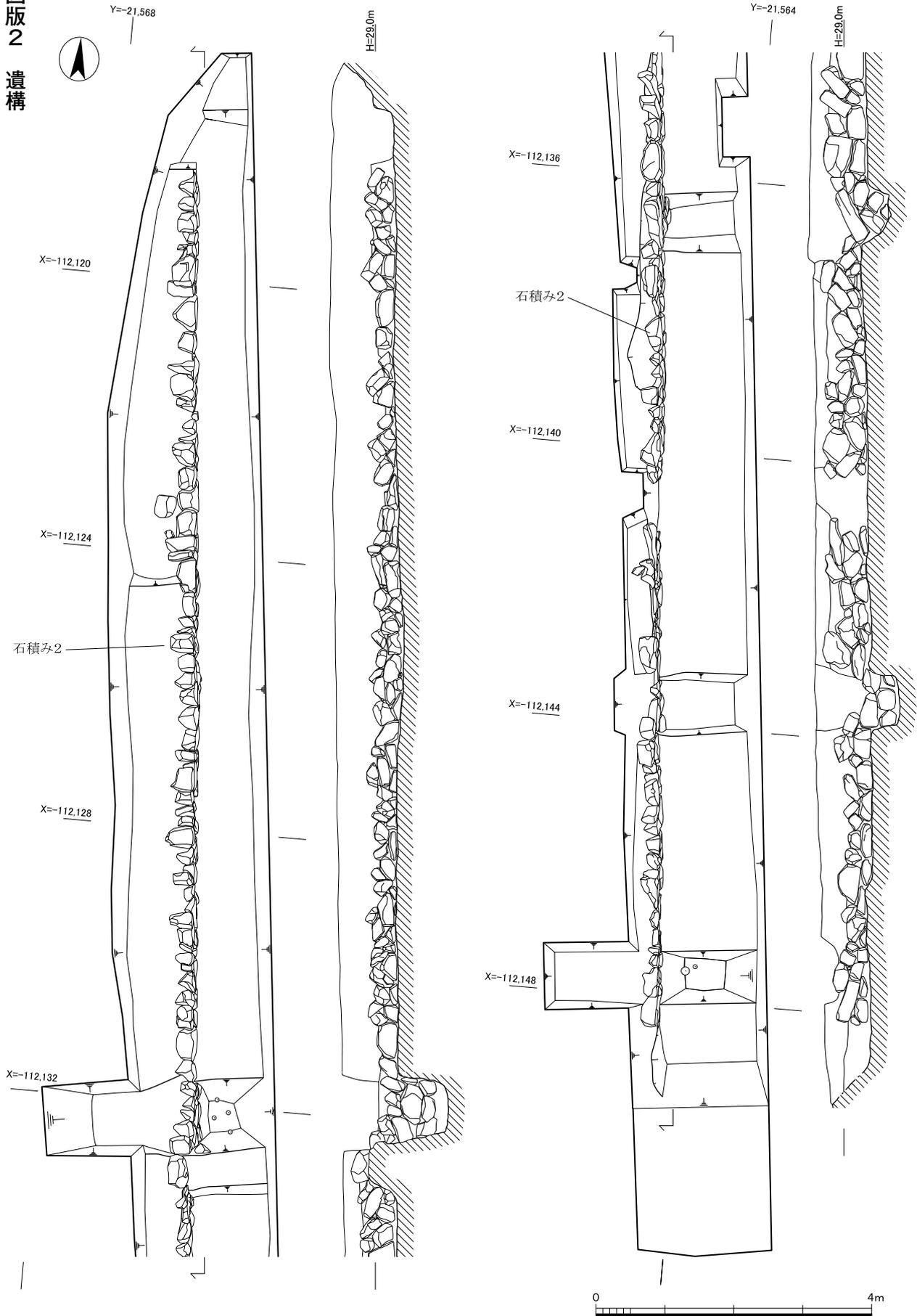
- 1) 近藤章子『平安京左京八条四坊九町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015 - 11 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016年
- 2) 近藤章子『平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015 - 12 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016年
- 3) 今村家文書研究会編『今村文書資料集 下巻 近代編』思文閣出版 2015年
- 4) 「4 史料近世1」『京都の部落史』京都部落史研究所 1986年
 「5 史料近世2」『京都の部落史』京都部落史研究所 1988年
 『京都柳原町史』『日本庶民生活史料集成 第十四巻 部落』三一書房 1971年
 山本尚友「六条村小史」『柳原銀行とその時代』崇仁地区の文化遺産を守る会 1991年

圖 版

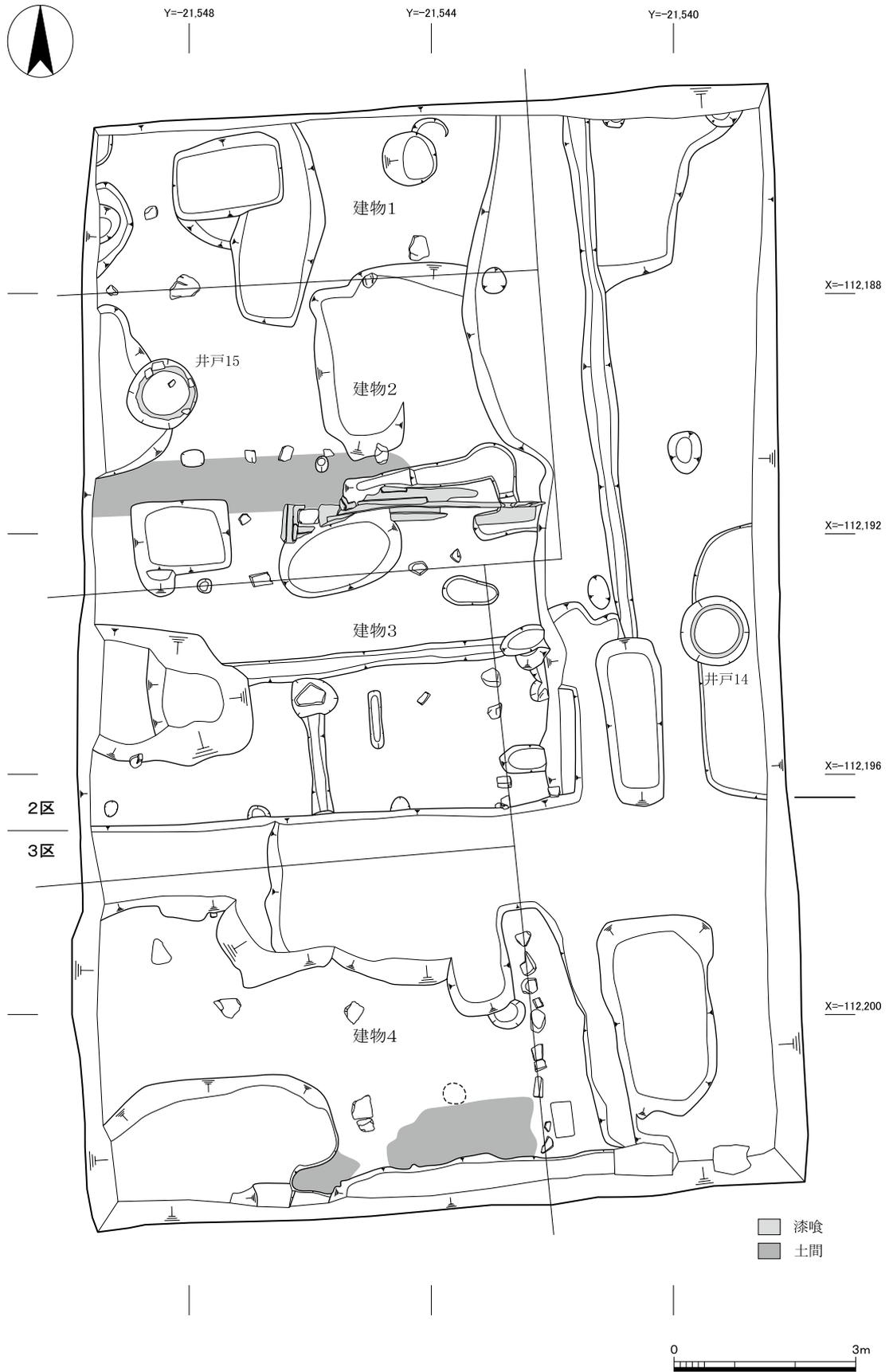


1区第1面平面図 (1:80)

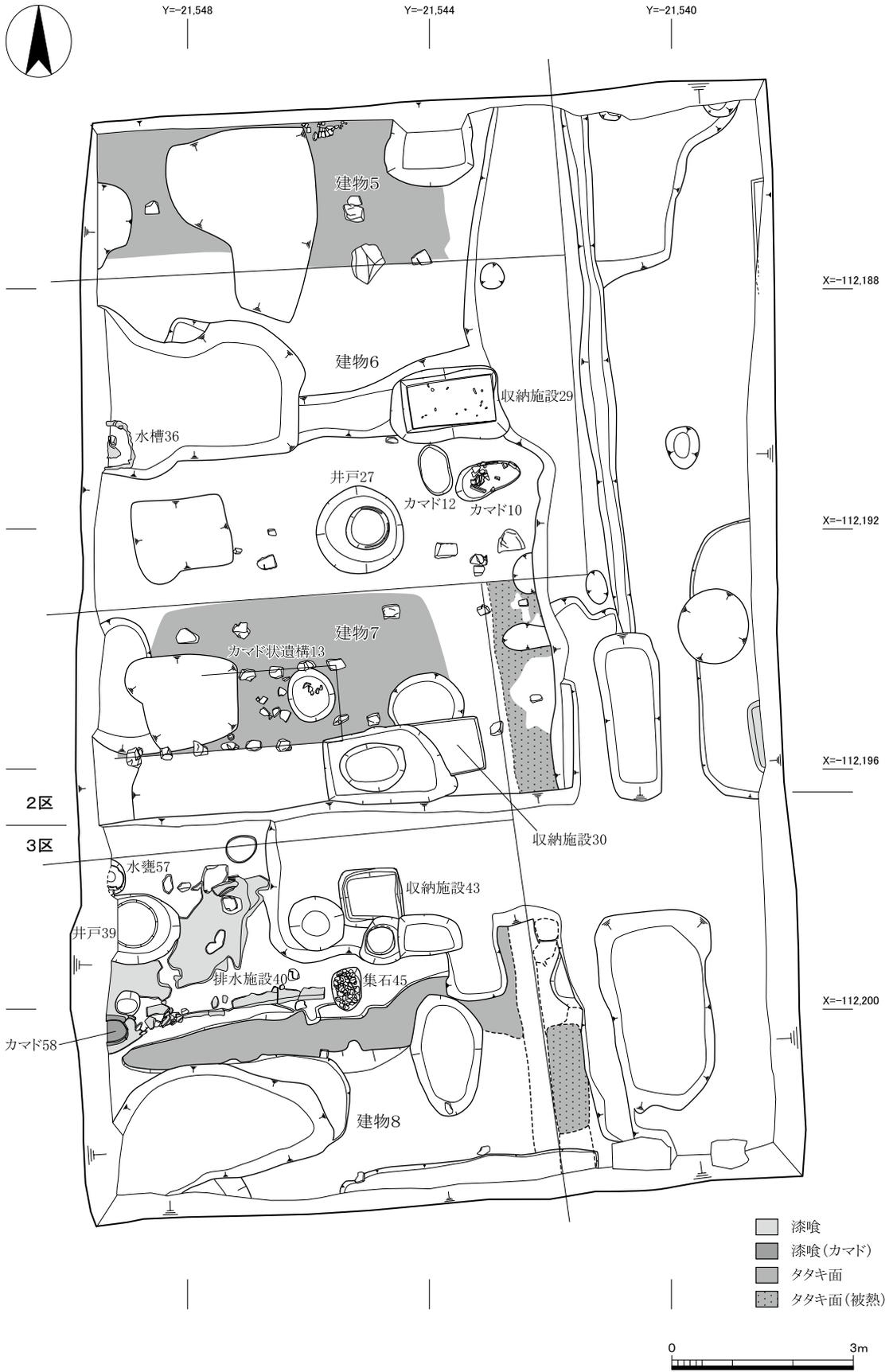
図版2
遺構



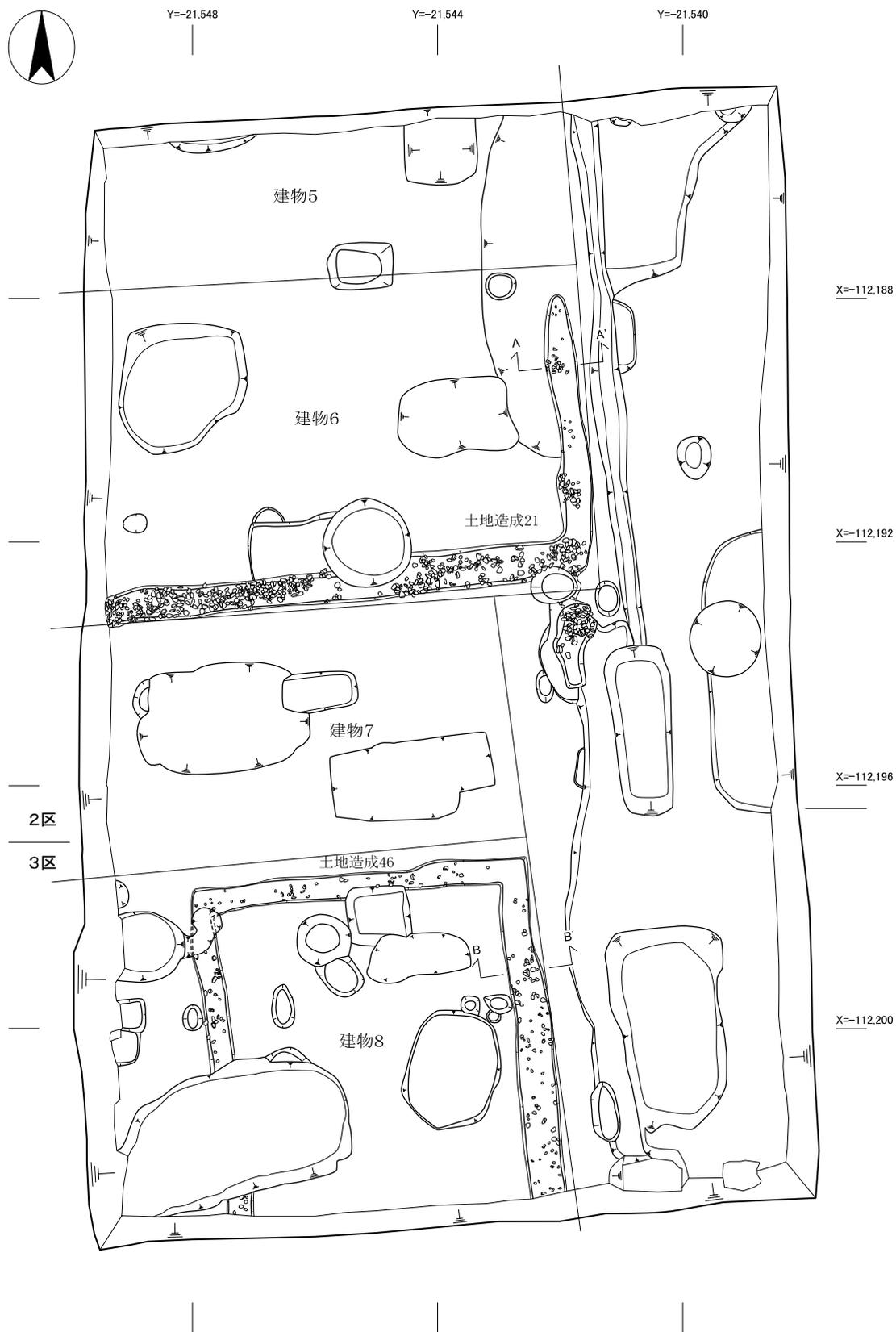
1区第2面平面図及び石積み2立面図 (1 : 80)



2・3区第1面平面図 (1:100)



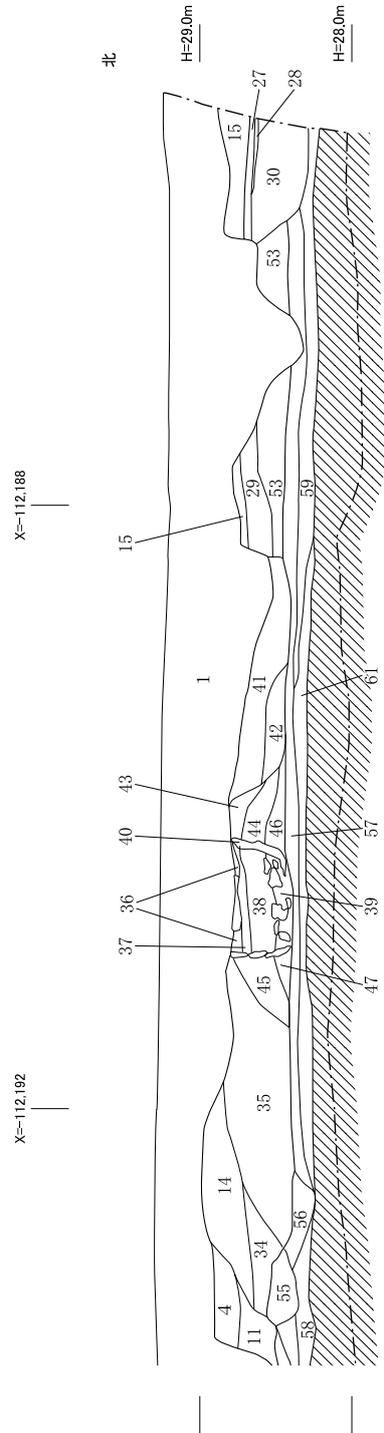
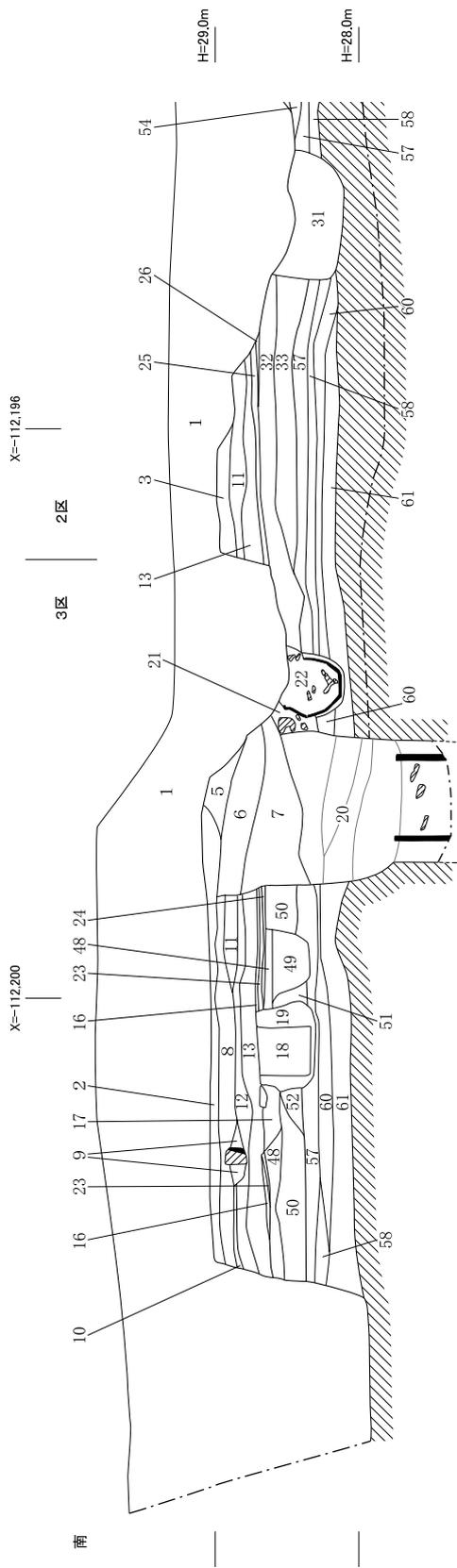
2・3区第2面平面図 (1 : 100)



※ A-A'・B-B'は図26に対応

2・3区第3面平面図 (1:100)

図版 6
遺構

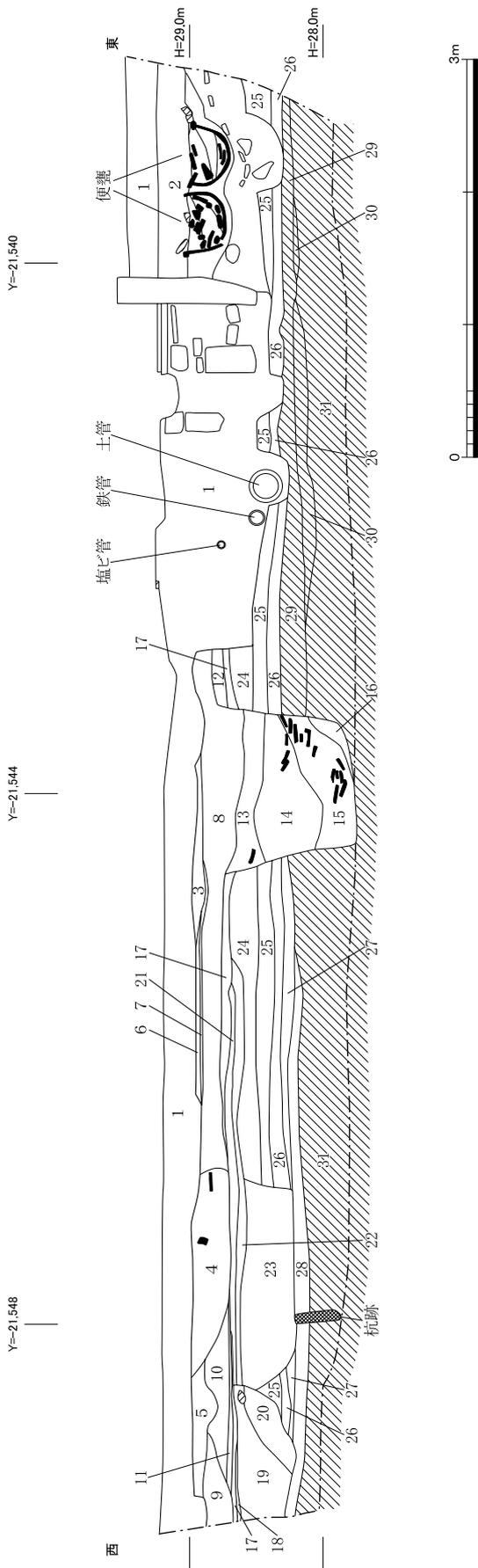


2・3区西壁断面図 (1:50)

2・3区西壁断面図土層名

- | | |
|---|---|
| <p>1 10YR2/2黒褐色 細砂～礫 (現代盛土)</p> <p>2 10YR3/2黒褐色 粗砂 木炭粒・10YR6/4にぶい黄褐色の粘土塊多量混</p> <p>3 7.5Y3/3暗褐色 シルト～細砂 木炭粒多量、木炭粒・漆喰少量混</p> <p>4 10YR3/2黒褐色 粗砂～礫 木炭粒・漆喰少量混</p> <p>5 7.5YR3/3暗褐色 粗砂 焼土粒多量、木炭粒少量混</p> <p>6 7.5Y3/4暗褐色 粗砂～礫 焼土粒・木炭粒多量、焼けた瓦片少量混</p> <p>7 7.5YR4/3褐色 細砂 焼土粒・焼けた瓦片多量混</p> <p>8 10YR2/2黒褐色 細砂 木炭粒多量混</p> <p>9 10YR1.7/1黒色 シルト～細砂 木炭粒多量混</p> <p>10 10YR6/6明黄褐色 漆喰</p> <p>11 2.5Y3/2黒褐色 細砂～粗砂 木炭粒多量混 10YR7/3にぶい黄褐色 漆喰</p> <p>12 10YR4/2灰黄褐色 粗砂～礫 漆喰、木炭粒多量混</p> <p>13 2.5Y5/4黄褐色 粗砂～礫 土器片多量、漆喰少量混</p> <p>14 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂～礫 木炭粒・漆喰多量、焼土粒・瓦片少量混</p> <p>15 10YR2/2黒褐色 シルト～礫 木炭粒・焼土塊・焼けた瓦多量混</p> <p>16 10YR1.7/1黒色 シルト～細砂 木炭少量混</p> <p>17 10YR3/2黒褐色 細砂 木炭粒少量混</p> <p>18 10YR3/2黒褐色 細砂 粘質 木炭粒多量混</p> <p>19 10YR7/6明黄褐色 漆喰 (カマド58)</p> <p>20 (井戸39)</p> <p>21 10YR2/2黒褐色 細砂～礫 瓦片・漆喰多量混</p> <p>22 10YR3/2黒褐色 細砂 木炭粒少量混 (水甕57)</p> <p>23 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト～細砂 粘土</p> <p>24 2.5Y3/2黒褐色 シルト 木炭粒少量混</p> <p>25 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 (土間)</p> <p>26 10YR6/6明黄褐色 漆喰</p> <p>27 10YR3/2黒褐色 シルト 木炭粒多量、瓦片、φ2cm礫少量混</p> <p>28 2.5Y4/3オリーブ褐色 細砂～礫 木炭粒多量混</p> <p>29 2.5Y3/2黒褐色 シルト～粗砂 木炭粒・漆喰片多量、φ2cm礫少量混</p> <p>30 2.5Y3/1黒褐色 シルト～礫 木炭粒・漆喰片・φ10cm礫多量混</p> <p>31 2.5Y5/3黄褐色 粗砂～礫</p> <p>32 2.5Y3/2黒褐色 シルト～粗砂 木炭粒多量、φ2cm礫少量混 下部に10YR6/6明黄褐色</p> <p>33 2.5Y4/3オリーブ褐色 粗砂～礫 木炭少量混</p> <p>34 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂 漆喰・木炭粒多量、φ1～3cm礫少量混</p> <p>35 2.5Y4/2暗灰黄色 粗砂～礫</p> <p>10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 硬い</p> | <p>36 10YR3/1黒褐色 細砂～粗砂 瓦片少量混</p> <p>37 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂 木炭粒多量、木炭塊少量混</p> <p>38 10YR2/1黒色 粗砂 木炭粒多量、焼土粒・礫少量混 (水甕36)</p> <p>39 10YR3/2黒褐色 粗砂 木炭粒少量混</p> <p>40 10YR7/6明黄褐色 漆喰</p> <p>41 2.5Y4/2暗灰黄色 粗砂～礫</p> <p>10YR4/4褐色 細砂～粗砂 硬い</p> <p>42 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂～礫 木炭粒・粘土塊多量混</p> <p>43 2.5Y4/2暗灰黄色 粗砂～礫</p> <p>44 10YR3/2黒褐色 細砂～礫 焼土粒・木炭粒多量混</p> <p>45 2.5Y4/1黄褐色 細砂～礫 木炭粒少量、φ10cm石多量混</p> <p>46 10YR4/2灰黄褐色 細砂 木炭粒・礫少量混</p> <p>47 2.5Y4/2暗灰黄色 細砂～粗砂 粘土塊・木炭粒少量混</p> <p>48 2.5Y4/4オリーブ褐色 シルト～細砂 粘土塊多量混</p> <p>49 10YR5/4にぶい黄褐色 細砂～粗砂 粘土塊多量混</p> <p>50 2.5Y4/3オリーブ褐色 粗砂～礫</p> <p>51 10YR4/3にぶい黄褐色 粗砂～礫 粘土塊多量混</p> <p>52 2.5Y4/2暗灰黄色 細砂～礫 木炭粒・粘土塊多量混</p> <p>53 10YR4/2灰黄褐色 細砂～礫 木炭粒多量混</p> <p>54 2.5Y4/3オリーブ褐色 細砂 木炭粒・φ3cm礫少量混</p> <p>55 2.5Y3/2黒褐色 シルト～礫 木炭粒・φ5cm石多量混 (土地造成21)</p> <p>56 10YR4/2灰黄褐色 シルト～礫 木炭粒・漆喰多量、土器片少量混</p> <p>57 2.5Y3/2黒褐色 細砂 木炭粒多量、φ0.5cm礫微量混</p> <p>58 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 木炭粒多量混</p> <p>59 2.5Y3/2暗オリーブ褐色 細砂～礫 木炭粒少量混</p> <p>60 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト～粗砂 木炭粒少量混</p> <p>61 2.5Y4/3オリーブ褐色 細砂～礫 木炭粒少量混</p> <p>62 2.5Y5/4黄褐色 粗砂～礫 (基盤層)</p> |
|---|---|

2区北壁断面図 (1 : 50)



- 1 10YR2/2黒褐色 細砂～礫 (現代盛土)
- 2 2.5Y4/2暗灰黄色 細砂～礫 (大正以後)
- 3 7.5YR3/2暗褐色 細砂 焼土粒多量・木炭粒・ ϕ 0.5cm礫・粘土塊少量混
- 4 7.5YR3/4暗褐色 細砂～礫 焼土粒・瓦片多量・木炭粒・ ϕ 1cm礫少量混
- 5 7.5YR3/2暗褐色 細砂 焼土粒・木炭粒多量・粘土塊・焼けた瓦片少量混
- 6 7.5YR3/3暗褐色 シルト～細砂 焼土粒・木炭粒多量 堅く叩いてある (タタキ)
- 7 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 細砂
- 8 7.5YR3/4暗褐色 細砂～粗砂 焼土粒・木炭粒多量混 (焼土層)
- 9 10YR2/2黒褐色 シルト～礫 木炭粒多量・粘土塊・焼けた瓦多量混
- 10 5Y4/3暗オリーブ色 シルト～礫 漆喰・粘土塊少量混
- 11 10YR6/6明黄褐色 シルト 粘土多量・木炭粒微量混
- 12 10YR4/3にぶい黄褐色 粗砂 漆喰片多量混
- 13 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～粗砂 ϕ 0.5cm礫多量・瓦片・漆喰少量混
- 14 2.5Y4/3オリーブ褐色 粘土～粗砂 2.5Y6/8明黄褐色粘土塊・瓦片多量混
- 15 10Y3/4暗褐色 粘土～粗砂 木炭粒・骨片少量・瓦片多量混
- 16 10YR4/4褐色 粗砂～礫 ϕ 0.5cmの礫多量混

- 17 10YR3/2黒褐色 シルト 木炭粒多量・瓦片・ ϕ 2cm礫少量混 (タタキ)
- 18 2.5Y4/3オリーブ褐色 細砂～礫 木炭粒少量混
- 19 2.5Y3/1黒褐色 シルト～礫 木炭粒・漆喰片・ ϕ 10cm礫多量混
- 20 2.5Y3/2黒褐色 細砂～礫 木炭粒・焼土粒多量・ ϕ 10cm礫少量混
- 21 2.5Y5/6黄褐色 細砂～礫 木炭粒・土器少量混
- 22 2.5Y5/3黄褐色 シルト～粘土 木炭粒・ ϕ 0.5cm礫少量混
- 23 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト～礫 木炭粒・漆喰片・粘土塊少量混
- 24 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 細砂～礫 木炭粒少量混
- 25 2.5Y3/2黒褐色 細砂 木炭粒多量・ ϕ 0.5cm礫微量混
- 26 10YR3/2黒褐色 細砂～粗砂 木炭粒多量・ ϕ 1cm礫少量混
- 27 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 細砂～礫 木炭粒少量混
- 28 2.5Y4/3オリーブ褐色 粗砂～礫 木炭粒少量混
- 29 2.5Y4/2暗灰黄色 粗砂～礫
- 30 2.5Y5/2暗灰黄色 シルト～礫 (江戸時代後期の造成土)
- 31 2.5Y5/4黄褐色 粗砂～礫 (基礎層)



1 1区 第1面全景（北から）



2 1区 第2面全景（北から）



1 1区 北断割部掘下げ状況（北東から）



2 1区 北断割部断面状況（北から）



3 1区 北断割部水路4・杭跡検出状況（東から）



1 2区 第1面全景（北東から）



2 3区 第1面全景（西から）



1 2区 第2面全景（北東から）



2 3区 第2面全景（西から）



1 2区 カマド状遺構13 (西から)



2 2区 カマド10・12 (東から)



3 2区 収納施設29 (西から)



4 2区 収納施設30 (西から)



1 2区 第3面全景（北東から）



2 3区 第3面全景（西から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうはちじょうしぼうはっちょうあと・おどいあと							
書名	平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2017-7							
編著者名	山下大輝・李 銀眞							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2018年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡 おどいあと 御土居跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 ごうのちようほからない 郷之町他地内	26100	1 149	34度 59分 20秒	135度 45分 50秒	2017年1月 23日～2017 年12月28日	306.1m ²	道路整備 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡 御土居跡	都城跡 土塁跡	江戸時代後期 ～末期 江戸時代末期 ～明治時代初頭	水路、建物、井戸、 水甕、カマド、カ マド状遺構、排水 施設、収納施設、 土地造成	土師器、須恵器、施釉 陶器、焼締陶器、染付、 磁器、土製品、瓦類、 石製品、金属製品、骨 ・貝類		近世以降の内浜と 高瀬川を繋ぐ水路 と西側護岸を検出 した。 江戸時代後期から 明治時代初頭まで の建物跡と土地造 成を検出した。		
			建物、井戸	染付、施釉陶器、煉瓦、 ガラス、銭貨				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-7

平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡

発行日 2018年3月15日

編集行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961